

「集落活動センター開所記念版」



大正中津川地名辞典

編者 武内文治



本村 (昭和 25 年)



森ケ内 (昭和 25 年)

中津川集落活動センター「こだま」

「大正中津川地名辞典」発刊に寄せて

縁あって、四万十町大正中津川と出会った。9年前の夏だった。

ガードレールがあつたりなかつたりする一車線の山道。どうしよう、人家が途絶えてしまった。道を間違えたんじゃないか、まさか行き止まりなのでは……。ぐっと道路がせり上がった先に見えるトンネル。そのむこうも、道。

小さな橋の手前に広場があつた。微妙な分かれ道だが右の道は草深く人の頻繁な行き来が感じられない。やはりまっすぐ行こう、と決めた。

広場はその日は桜の青葉で囲まれていた。その後、数えきれないほど中津川に通ううちに、ある日、広場いっぱい満開の桜に出会うことになるのだが、それを想像する余裕すらなかつた。

ややあってカーブを曲がると目に飛び込んできたのは、愛らしい集落と夏の日が陰りかけた山々だった。安堵のため息とともに車の速度を落としながら、初めての場所なのにまるで帰ってきたように感じたのが今でも不思議でならない。これが私と中津川の初対面である。

それから、通えば通うほどに大好きになっていく中津川。ここを訪れるひとは誰もが同じ思いを持つらしい。そんな中津川の魅力を伝えたいと切望し、集落の方々の微笑みをもって叶えられた行き来は、先日一冊の本に結実した。

そして最近、さらに嬉しいことに、この「大正中津川地名辞典」の発刊を知った。

思えば私の本は風の本。中津川の暖かさと香りをできるかぎり遠く広く運んでいこうとする。一方、地名には集落に暮らすひとびとの自然への畏れ、願い、喜び悲しみの記憶が刻みこまれている。「大正中津川地名辞典」は集落のありかを際立たせる土の本、大地の本だ。

実をいうと私は中津川集落がどのように生まれ育ってきたのか気になって仕方ない。地名を追っていけば、ある時代の出来事が残っていたり、今はない昔の自然の面影がとどめられていたりすることだろう。ページをめくるのが楽しみだ。

そういえば9年前。

私の車は、大奈路から「古宿」の集落を右手にのぞみつつ、昼間でも木下闇がひんやりする植林の間を抜け、久木の森をショートカットする「中津川トンネル」を抜け、桜に囲まれた「こらば」と成川口の橋のたもとでかつての「軌道に至る道」をうかがいながら、「関札」にも気づかないまま「てんぶんカーブ」を回って。

……中津川に帰ってきたのだった。

平成27年3月20日



山崎 眞弓

目 次

「大正中津川地名辞典」発刊に寄せて.....	2
凡 例	4
序 論	6
あ	10
か	12
さ	14
た	15
な	17
は	20
ま	21
や	22
ら	23
わ	23
引用資料・参考文献	24
付 録	33



山崎真弓さんのプロフィール

1955年、高知県に生まれる。

「農林漁家民宿おかあさん百選」選定委員会アドバイザー

四国むすびのネットワーク代表

第59回（平成26年度）高知県出版文化賞を受賞

「農家民宿はこばの四季 四万十町大正中津川のくらし」

凡 例

1. 見出し語について

- (1) 配列は、現代仮名遣いの「あいうえお」順とした。ただし、「ぢ」「づ」はすべて「じ」「ず」とした。
- (2) 見出し語は、「ひらがな【漢字】」とゴシック体・強調体で示し、続いて分類を()書きで表記した。ただし、当て字の多い場合は明朝体で主なものを列記した。
- (3) 見出し語の読み方は、中津川地区で一般的に使われている読みとし、現地踏査により編者が判断した。使用頻度の高い他の読み方がある場合は解説文に併記した。信頼ある書籍、橋名板等に掲載された地名にふりがなを振っている場合を除き、語尾につく川や谷、橋の読みは原則清音を用いた。
- (4) 字、ホノギ等の特徴的な語彙（地名の一部を含む）については、見出し語に加えた。
- (5) 地名の起源・由来については、見出し語の後に「(地名用語)」と付記して、語源の研究の通説を簡便に引用し文献資料を《略語》で示した。文献資料の詳細は巻末に「引用資料・参考文献」として区別で刊行年の順に書名・著者名・刊行年を記載した。
- (6) 見出し語となる地名の採択は、国土地理院発行の25,000分の1の地形図、旧町村史(誌)など町内に関連する出版物に掲載された地名を採取するとともに、電子行政オープンデータとなっている資料等を補完的に利用し、編集方針により編者の判断で行った。なお、引用した電子行政オープンデータ等は付録にURLを付記した。

2. 解説文について

- (1) 見出し語の次に必要に応じて、改行して電子国土Webから2万5千分1地形図名、十進表記の経緯度、標高の位置情報を付記した。線、面、3次元的な地名については区域の中心地、若しくは集会所、神社の所在地等を考慮し編者の判断する地点とした。引用数値は正確な所属を示すものではない。この十進座標をコピーし「地理院地図(電子国土Web)」の上段バーにペーストすれば地図上の位置が確認できる(このソフトは距離・面積計測、3D表示など多くの地図情報をみることができるので利用を進める)。
- (2) 見出し語のあと一文字のスペースを入れてから、明朝体で解説文を記述した。
- (3) 解説文は、原則として次の順序で記述した。
 - ①位置情報
 - ②地名の起源・由来情報
 - ③現況の資源(名所・施設・産業・人口)
 - ④歴史史料
 - ⑤比較情報

3. 主な符号・記号について

- (1) ()内は、読み方・意味・説明・注記・所在・年代などに用いた。年代は(西暦・年号と年)とした。事例(1954昭和29)。ただし、文末に付ける場合は、引用書籍名とした。また、現地踏査で地名説明をしていただいた人は敬称を略して(〇〇談)とした。
- (2) 「」は引用文・書籍名・史料名・特殊な語句を囲むために用いた。引用頻度が多く明らかに書名とわかるものについては省略した。

(3) 『 』は書籍のなかの文章を引用するときなどに用いた。

(4) →は、別の見出し語を「見よ」、詳細は書籍を「参照せよ」の意で用いた。

4. 取り上げた地名の本書における見出し語の分類と定義

見出し語（読みと漢字）に続いて、地名を下記の用語で区分し（ ）書きで分類表記した。

《郷村》：近世の行政単位（長宗我部地検帳～明治維新期）。

《町村》：近代の行政単位（1889 明治 22 年市町村制～現在）

《地域》：本書では、平成の町村合併以前の旧幡多郡大正町及び旧幡多郡十和村並びに旧高岡郡窪川町の街分・郷分・立西・松葉川・仁井田・東又・興津、の 9 区域を「地域」と定義した。

《行政区》：数十世帯から数百世帯をひとまとめにした、ほぼ大字を一つの単位とした住民自治組織。地区とも部落とも呼ぶ。一つの行政区は、複数の組（班とも呼ばれる回覧板の回される範囲）で構成されることが多い。当該行政区を指す場合は、「○○地区」と表記する。

《大字・字・ホノギ》：明治の市町村制（1889 明治 22 年）の施行時に従前の郷村を大字とし、その下にあった区画単位を字（小字）とした。地検帳の主となる田畠屋敷の区分け名称をホノギとした。一筆限絵図面に記載している字も含む。

《区域》：本書では、国土地理院発行の 25,000 分の 1 の地形図に明示されている、複数の行政区を呼ぶ地名を「区域」と定義した。興津地域では行政区の三つの集合体（島戸、浦分、小室）を総代といまでも読んでいるが、本書では区域と位置づけた。七里区域・米奥区域（松葉川地域）、大正北部区域（旧大奈路小学校校区以北）、打井川区域（口・中・奥）、広井区域（広瀬地区・井崎地区で、旧広井小学校校区）等

《集落》：行政区の一部で通称として馴染みのある一定の範囲を呼ぶ地名を「集落」と定義した。25,000 分の 1 の地形図に明示されている場合もある。行政区の一部である組（班とも呼ばれる回覧板の回される範囲）となる場合もある。上作屋地区の平田集落、大正中津川地区の本村集落、十川地区の白井川集落等

《河川》：河川法では一級河川（水系）を国の管理下に、二級河川を高知県管理とし、それ以外の普通河川のうち四万十町が指定したものを準用河川と呼び、この 3 区分以外の河川を普通河川という。本書では必要に応じて管理区分を併記する。見出し語となる河川の名称は、河川法上の名称を優先し、別の呼び名がある場合は（括弧）書きで示し、詳しい解説文が必要な時は、（→見出し語）と表記し改めて解説を加えることとした。

《谷川》：主に高知県ホームページの「高知県防災マップ」に登載された溪流で、河川以外の自然水流。

《山・三角点》：国土地理院発行の 25,000 分の 1 の地形図に明示されている山名と 4 等以上の三角点。その他歴史的な文書に記載された山及び森林を加えた。

《道路》：道路法第 8 条の規定により四万十町長が議会の議決を経て認定した町道。その他添え蚯蚓へんろ道、矢立往還等の歴史的な道も加えた。トンネル・橋の施設も道路とした。

《施設》：重要な公共施設、ランドマーク的な構造物は、「施設」と定義し掲載した。

《寺社》：神社及び寺院。

《屋号》：明治維新前、苗字の代わりに、集落内で世帯を区分するため使用した名称。

《通称》：現地踏査で採取した、地元で利用する地名。

序 論

本書を読むにあたっての予科を序論とした。(編者：武内文治)

1. はじめに

久木の森山風景林を周遊すると「ぎんだごや淵」の表示板がある。銀太という人の小屋がありその付近の淵をそう呼ばれていたという。すぐ上流にはぎんだごやの落ち込み淵があり下流にはぎんだごやの瀬がある。銀太小屋は朽ち果てたものの今もなお地名として利用されているのは、溪流釣りに特定する地名として役立っているからに違いない。

中津川の地名で文字として最初に記されているのは長宗我部地検帳で、現存している 368 冊のひとつの表紙には「慶長貳年丁酉年二月六日 土佐国幡多郡上山郷地検帳」とある。中津川の検地は下津井の「ソウカイ」「イノ、」「舟ノセ」から足川経由で森河内村に入り中津河村を終えて三月廿四日に下道村へと移っている。当時の田畑宅地を固有する地名はホノギとよばれ、現在の公称地名の字にあたるものであるが、慶長時代に使用されていた地名が現在も使われている。森が内集落では、「中ヤシキ>中屋敷」「上クホ>上ミ久保」「タカヤフ>高藪」、本村集落では「中カイチ>仲ヶ市」「地蔵院ヤシキ>地蔵院」「ツルイノモト>ツルイノ本」「ウシハラ>ウルシハラ」、成川では「成川>成川」「ウスキ>薄木」がある。詳細は文末の付録3に記した。

現在使われている公称地名としての微細地名は小字であるが、この小字は土地の表示に関する登記として「土地の所在」に記載されている。四万十町は番地を大字（例えば大正中津川）ごとに起番していることから地番の識別に小字（例えばツルイノモト）が必要でなくなり、いつかは廃れる運命であろう。若い人が日常会話に字名を使って場所を特定することは皆無といえる。地名が生き物である以上、消えゆく地名は致し方ないかもしれないが、過去の様子を推測する手がかりになる「歴史遺産」でもある。六郎谷はロクロを由来とする地名で木地師が住んでいたのではないか、地蔵院は昔に寺社が所在したところで、仲ヶ市はヶ市をカイチ（カイト・コウチ・カイド・垣内・開地・河内など）とすれば（民俗地名語彙辞典上 p 190）、村内に新たに開墾された耕地が形成され本村の分村として奥に森ヶ内がありその間に仲ヶ市が位置付けられたのではないか。「・・久保」や「梅・・」の災害地名、「・・駄場」や「・・畝」の自然地名、「・・タオ」などの方言転訛した地名、これらの類似地名が流布・分布した交流のあかしなど聞き耳を立てれば饒舌にも語ってくる。地名は先人の語り部である。

また、「地名」は地名が本来的にもつ表象として命名者の願望や思想をも反映するもので、人為的に作用されることになる。その作用された新しい地名のひとつが平成の合併を機に改められた「大正中津川」である。この合併を機に大正町では四手ノ川も希ノ川に改称した。鳥が古城となり、黒川が里川になったように暗いイメージの地名を佳名好字とした命名者の意思の表れであろう。四手が死への旅立ちをイメージするからという地区民の思いであった。ただ、地区民総意とはいえ安易な地名の変更はいかがなものか。窪川には五社さんの鎮座する仕出原（しではら）があるように「四手・仕出」は「紙垂（しで）」で注連縄や御幣などにつけて垂らす断ち折った紙のことであり、断ち方が稲妻をイメージしていることから稲作

豊作や邪気を追い払う象徴でもある。四手ノ川の二つに分かれる地形が御幣に挟む紙垂（四手）に似ている由縁か、シデの木が群生していた土地であったかもしれない。「田野々」も「大正」に改められた。消えゆく大正町の名を残すため役場の所在地であった田野々を廃して大正にしたという。大正天皇の即位を由来とした大正より古い田野々地名がなくなること、を為政者は後世にどう説明するのだろうか。四万十町が発行する四万十町全図に田野々や四手ノ川を併記するように求めたが「町の公称地名として田野々や四手ノ川は存在しない」とのことで頑なに記載を拒否された経緯がある。消えた地名は語る場を失う。

昨年の9月に念願の中津川2号橋が竣工し災害に強い安全な通路が確保できたが、中津川にはこの1種町道の大奈路中津川線のほか中津川1号線から8号線の自然数による名称が付されている町道がある。橋梁や道路施設の名称も地名の対象であるが、この自然数の名称が実用上の要請として何を語るのだろうか、行政のセンスを疑うものである。町道成川線であれば成川口を起点として、国有林野にぽつんとある民有地の成川集落のあったところまでだろうと想像できるし、町道森ヶ内線は大奈路中津川線の終点から森が内集落を登りつめる路線で、久木ノ森線は中津川トンネルができたことから従前の回り道を久木ノ森線としたのだろうと理解できる。中津川1号線は、農家民宿はこばを通りサワタリ沈下橋までの路線であるがサワタリ線や函場線としないのはどうしてか。自然数の地名は何も語ってくれない。

「地名」はその時代の生業や地形の語り部であり、時代の経過により変化する生き物でもある。民俗学者の柳田国男は「地名の研究」で『人と土地との交渉がすなわち地名である』と述べているように、地名は、一人若しくは二人以上の人認知できる特定の箇所に対して言葉や文字で付される固有の名称であり、未来への希望やリスクを示す命名者の意思の表れでもある。

博物館が「モノ」を主人公として、幾多の災害や困難を乗り越えて時を引き継ぐ伝世品が大切に扱われているのに比べ、「地名」はモノとして銘板に刻まれることはあっても固有の名称として人が人に特定の情報として伝えるための道具でしかない。日用雑貨のように使われることにその使命があることは理解しているが、ぞんざいな扱いをうけていることが残念である。

東日本大震災からはや4年が過ぎた。東北にも高知にも津波を記録する古来の「災害地名」がしっかり残されている。私たちはその地名から先人が自然災害に対し後世に喚起したメッセージを読み解く責任がある。

自称地名ハンターとして地名を摘み紡ぐものとして「地名」に敬意を払っていただくことを切に望むものである。

この書の奥付にあるように中津川伝統文化グループに招かれ地元の人と旧往還道を歩くなど共に活動することとなった。悔しい思いながらも合併10周年となる節目として「大正町地名辞典」の発刊準備をしていたこともあり、これをきっかけに「大正中津川地名辞典」を試しに書きまとめたものがこのPDFである。大正町誌の編者である土百姓伊与木定氏のみねごととして、引用資料や参考文献を『掻き暑め』で、巻末に掲載した。

この書は現時点での記録であり、私見の誤りの発見や地名研究の新説などの改訂については多くの人の参画を求め不断に更新することを願いとするものである。

2. 「中津川」アラカルト

暮らしの水と川

大正には中津川、芳川、葛籠川、四手ノ川、打井川などのように「川」を語尾に付けた郷村が多く見られる。狭隘な山間地で熊手のような谷川の流域を生活圏とするこの地のひとは、それぞれの流域で村落共同体を形成してきたのだろう。

「地名用語語源辞典（楠原佑介・溝手理太郎編）」では川の解説を『古くは「井」が「川」を意味したのに対し、「カハ」は日本の各地で「井戸・掘・池」を表す用語として使われてきた。これは井とカハの意味内容が転換したわけではなく、我々の祖先にとっては「水そのもの」が重要であって、河流を源流から河口部まで一本の流れとして認識する必要はなかったのではないか。』と述べている。「民俗地名語彙辞典（松永美吉著）」ではカワの解説に『井戸のことをカワというのは、沖縄から四国の愛媛県あたりまで（中略）昔は「井戸」と「川」とは、日常生活のうえでも、語形のうえでも区別されなかったのではないか。カワという語の意味は、日常の生活に必要な「井戸」の方へ重心を移していったのであろう。』と述べ、井戸をカワと呼んでいる地域では「川」をナガレガワ、カーラ、カアラといったという。

昔の暮らしでの水利用は、日常的には井戸水や自然湧水を樋で引込んで利用し、正月の若水だけは名残として流れ水から汲んでいたものではないか。谷川の名称が中津川であろうがなかろうが末子ばあさんが洗濯に行くのはサワタリの「おきの川原」でことたりたのだろう。州郡志の中津川村の項に山川として記述しているのは「成川谷」と「小松谷」だけである。

中津川か中津川川

この州郡志の上山上村の本村（田野々）の項に四至として『東限瀬里村西限大川南限家之市北限後山・・・津野山川在西新井田川在南過合流』とある。川を特定することは、役人や旅人など外の人には必要でも地下の生活者にとって固有な名称としての川は必要なかったのだろう。身近な川は「川」であり、利用する「川原」であって、合流する大きい川は「本川」と区別していたのだろう。流域の河川名称は生活上において必要でなく、郷村としての名称で事足りたといえる。同じく山もそうである。利用する里山、奥山（御留山）の森林に固有な名称を付したのであって、登山の習慣もない昔は山頂に何の興味を示さなかったのではないか。州郡志にも記しているのは御留山だけである。明治になり所有区分するため特定の山頂を中心に裾野を区画し、東峰山、西峰山、北峰山としたのではないか。

町内に多く見られる川地名だが、「渡川水系河川整備計画・平成 27 年 2 月（国土交通省四国地方整備局/高知県）」に芳川は芳川川、希ノ川（四手ノ川）は四手の川川、窪川中津川は中津川川とある。大正中津川に流れる河川の公称は「渡川流域 2 次支流中津川」となっている。ちなみに川の起点は栲原川合流点であるが終点は、『右岸森ヶ内山・左岸北峯山』となっている（渡川水系河川整備計画 p 122）。国有林は管理外ということである。また、中津川トンネルの大奈路側に架かる橋の銘板には「中津川川」と書かれているが、一番新しい中津川 2 号橋には「中津川」と書かれている。芳川の川をだれも「よしかわがわ」とは言わないが、気にする人は悩むかもしれない。

四万十市の旧名称の中村市もそうである。土佐一条氏の城下町として歴史を刻んだ中村は明治の合併で中村、右山村等が合併し、中村（中が地名で村は市町村制の区分）が発足し明治 31 年に町制施行したおりに中村から中村町に名称変更した。地名である「中」と自治体区分名称である「村」が一つの固有化され、それに町制の区分名称が加えられたことになる。松葉川の中村も郷村名がそのまま大字となったものである。地名 2 文字化の習慣から一

文字を避けた結果だろうか。いずれにしても芳川川としたのは、芳川は郷村の地名であって河川流域を示す固有名称は「芳川（吉川）＋川」と生真面目な行政職員が名付けたのだろう。

また、「橋」は「はし」か「きょう」か、「川」は「かわ」か「がわ」か。先ほどの中津川橋は「なかつかわはし」と読みを入れているし、中津川2号橋は「なかつかわにごうきょう」と書かれている。いずれにしても、構造物の銘板はその名称を長期間公称することになるから、注意を払っていただきたい。

橋梁の名称などを示すために設置される銘板を橋名板というが、橋歴板（事業主体・橋の構造・材質・設計施工会社など）も設置する自治体もあるという。昨年、大正大奈路にできた橋の橋名板で見ると、右岸からみて左側に「漢字表記の橋名（大木絆第二橋）」右側に「交差する河川などの地物名（梶原川）」、左岸からみて左側に「ひらがな表記の橋名（おおききずなだいにきょう）」右側に「竣工年月（平成26年5月）」と、高知県建設工事仕様書第6編道路編の4-8-10橋名板の項に基づき書いてある。このことから、国道439号線の起点が徳島であること、2号橋が先に完成したことが推測できるが「大木絆」は意味不明。管理者に照会すると「地元が、大奈路と木屋ケ内の頭字に絆を加えて命名した」とのこと。橋の名前の付け方には苦労があるだろうが、「大奈路のかみの橋」と名無しの権兵衛橋とならないよう、親が子供の名前を決めるときの愛情をもって名付けていただきたいものだ。

百年単位で記憶される橋については、橋の命名、記録する橋構造等の内容、親柱・高欄のデザインなど請負契約額の1%程度は必要経費としてしっかり充てて架橋していただきたいものだ。北幡の赤鉄橋といわれる大正橋の親柱は、今も堂々とした佇まいを主張している。

中津川の地名考

全国の中津川地名（詳細は巻末の付録4全国の中津川を参照）は、全国各地にみられるが、その多くの河川は、山奥深い谷川であり、ナカの音のごとく幾つかの集落の中を意味するところが見うけられる。

『民俗地名語彙辞典』では中津川について『山奥の在所の地として折々きく。その最も奥まったのは秩父の中津川である。』と説明し、ツについては『土地の便、不便。交通の良否を「ツが良い」と岡山、山口、秩父などにある。このように「交通位置」のツから、船着き場や港の意となった。』とある。

『地名用語語源辞典』ではナについて『①場所を示す接尾語。「土地」をいう古語のナ。②接頭語もあるか。』とし、ツについては『①港。渡し場。ト（門）と同系か。②泉などの水のある所、また単に海岸をいうか。③近世に①の意から転じて「人の集まったところ」特に大都市をいう。④場所を示す接尾語。ト（処）と同系か』と述べている。中津については『①ナカ（中）・ツ（津）で「中心となる港湾の所在地」②ナカ（中）・ツ（場所を示す接尾語）で、中心となる地。』とある。

また『地名語源辞典（山中襄太著）』ではナカについて『親村から子村が四方へ分れ出た場合に、その中央にある親村を中村、本村、元村、本郷、元郷などと呼び、また単に中、元、本、茂登などとも呼ぶ。』と述べている。

大正中津川の場合、村落の中心地として「本村」が栄え、小高い所の新たな開墾地として「森が内（盛り河内・カイチ。溪間の小平地）」ができて子村となり、下に「成川（緩傾斜がナルで、なそーなった所の川）」が次に開拓され、三集落に流れる郷村の名を「中津川（中津に流れる川）」としたのではないか。

あ

あいびや【アイビヤ】(字)

土佐松原：33. 27056, 132. 991664

大正中津川の本村集落から森が内集落へ向う旧往還道、中津川小学校から岡ノ越を越して仲ヶ市を通るところの東峰山側に所在。

語尾に「ビヤ」が付されるのは珍しいが、「牛のきた道 p 115 (本間雅彦著)」には『「ビヤ」を冠したカナ地名の 34 例が高知県にみられる。全国のビヤクビ地名 122 例、漢字の枇杷や琵琶やビワ・ビハでもない、「ビヤ」を牛の古称であったと結論せざるを得ない』と解釈している。ビヤの転訛とみられる「宮」を加えると町内随所に字名(例えば宮首・ミヤクビ)として見られ、牛か神社か現地での検証がいる。

「アイ」はアエ(饗)で、飲食のもてなし、饗応、馳走のこととすると、アイビヤは「中津川の謝肉祭」となるのか、不思議な地名である。

あさひやま【朝日山】(字)

土佐松原：33. 261213, 132. 983317

大正中津川の久木の森からサワタリまでの中津川右岸・西側。矢立往還の中津川分れの沖側。道より上の山側は西峰山。広葉樹林が全域を占める。

あざみはし(あざめはし)【筋橋】(道路)

土佐松原：33. 281207, 132. 996535

大正中津川の森が内集落の入口、町道大奈路中津川線(路線番号 20127)に架かる橋。漢字の訓読みは「あざみ」だが地元では「あざめ」と呼ぶ。橋梁番号 4713。コンクリート床版橋。延長 18.50m。橋名板には「筋橋、昭和 37 年 3 月架設」とある。

あざみやま(あざめやま)【筋山・筋山】(山名)

北峰山のことか。「御留山改帳」に記述された御留山。『高さ六町横一二町立木二九五九本、桧三七〇本、樅八六七本、梅一〇五九本、松五五五本、薪二五艘荷』とある。町史には筋山とある。森林管理署の図面では「大筋林道」「大筋山」「小筋山」とある。地元では単に「あざめ」と言う。

「搔き暑めの記 p 287」に『中津川国有林、小松尾山を今から百七、八十年前に、信州の牛窓という山師がきて仕成をしたことがある。あざめ山に松の良材が大量に生立しておった。木目の通りが非常に良く柁目の良材が生産さ

れた。』とある。

「高知県方言辞典」にアサマジメは『幡多の方言で夜明け方、夜明けまでのうすぐらいときの意味』という。森が内集落の東側にあたるこの山に、朝まだき、山師の声が「おかー、あざめに行ってくるぞ」と響きわたる。

いっぽんすぎばし【一本杉橋】(道路)

米の川：33. 299933, 133. 013036

小松尾山の中ほど、中津川林道が左岸から右岸に渡る橋。昭和 40 年 3 月架設と橋名板にある。高欄もあり、四方には橋名板もはめ込んだ親柱もある、苔むした立派な橋。ここ周辺は谷川も近く散策には丁度いい。

いでがたに【井出ヶ谷】(字)

土佐松原：33. 296799, 132. 997291

大正中津川の北部で、禰原町境。松原中津川トンネルの上部。4 等三角点井ノ谷(724.0m)がある。

いでのたに【出ノ谷】(山名)

土佐松原：33. 29805, 132. 99411

標高 724.3m。4 等三角点。位置は小松尾山の南、大正中津川△禰原町。国有林野名は出ノ谷山 4025 林班

いんきょ【インキョ】(屋号)

旧成川集落の最後の住人が林氏の先祖である。このことから林真次宅の屋号をインキョという。

うしはら【ウシハラ】(ホノギ)

地検帳の中津河村検地はこのウシハラがすむとサワタリ、成川で終わっている。ウシハラが転訛して今の字「ウルシバラ」となるか。

ウシについて『①ウチ(内)の転か。②フチ(縁)の転か③動物の牛にちなむか④十二支の丑の方向。北北東』。またウチについて『内側の意。入り組んだ地形、山谷の小平地。フチ(縁)の転か。ウチ(打)で崖など切り取られたような地形』。またウルシとして『漆を採取した所。ウル(潤)・シ(接尾語)で湿地』(地名用語語源辞典)

本村集落の入口、長防谷の下流域の形状から判断すると、削り取られた小平地か。

うしのだば【ウシノダバ】(字)

土佐松原：33. 267519, 132. 991557

本村集落の中心地。消防屯所、旧二宮商店の沖側はサワタリ橋まで。山側は扇平の山際までのいわゆる駄場地。

藩政時代、中津川村は大奈路三ヶ村庄屋の支配下にあり名本が置かれていた。その役宅は字ウシノダバ(島崎宅)であった。明治 31 年(1898)6 月、中津川尋常小学校校舎がウシノダバ 130 番に建築許可となった。(大正町史 p 295)

うすき【薄木・ウスキ】(字・ホノギ)

土佐松原：33. 256337, 132. 997173

大正中津川の南部。成川口から左岸の山林が全域を占める。西側に民有林が一部あるが大部分が国有林。南側稜線は木屋ケ内(古宿)境となる。「西南の地名 p 57」では『臼木なども同じ意。臼形には無関係。いしがうすに転訛。石地の小さい谷の所。須崎にある』とある。薄木山→

「州郡志・下 p 325」の中津川村の四至として『南限臼杵』とある。

うすきはし【薄木橋】(道路)

土佐松原：33. 256213, 133. 00077

町道中津川成川線(路線番号 20133)が旧成川集落の手前、宮の谷を渡る橋。橋梁番号 488。コンクリート床版橋。延長 6. 00m

うすきやま【臼杵山】(山)

土佐松原：33. 256337, 132. 997173

「州郡志・下 p 325」の中津川村の山川に『臼杵山 扇山 在村東南』とある。木屋ケ内(古宿)の境。後年、薄木の字が当てられたか。

うすきやま【薄木山】(国有林)

土佐松原：33. 249751, 133. 002173

成川左岸の下流域にある国有林野。4013、4014 林班。町道成川線、成川林道、成川林道 14 支線、谷止コンクリート薄木山 1 号がある。

うねのはな【畝ノ鼻】(字)

土佐松原：33. 269327, 132. 988912

本村集落から山道で岡ノ越を越えたところでこの先が仲ヶ市。地名のごとく「畝の鼻」に位置する。「高知県方言辞典」では畝は山の斜面の高まった所、通路にあたっている小さな峠の意味で、鼻は岬、突端の意味。

うばのふつくる【姥のふつくる】(通称)

矢立往還が下津井分れから西側におれると松原往還、森ヶ内分れとなる。この下津井分れから松原境までの稜線は、標高 740m の平坦地で揺籃のさまから「姥のふつくる」と名付けられたか。森が内集落の降り付きは、中屋敷→

うまみちはなやま【馬道鼻山】(山名)

貞享元年(1684)年の「御材木積帳幡多郡」に記載。材木の製品明細の細目はない。

うめのきさい【梅ノ木才】(字)

大正中津川の森が内集落の右岸の上段部の字。ウメ(埋・梅)は地すべりで埋まったことを意味する災害地名。『山中の地名に梅ノ久保があり、地すべりとすべった土砂の両方を言い表している。山腹の棚地形をさす』(民俗地名語彙辞典)

ウメ地名は梅木谷山(若井川)、梅ノ木ノ本(東川角)、梅ノ窪(野地)、梅木谷(勝賀野)、

梅ノ木才能(市生原)、梅原(奥呉地)、梅ノ木(魚の川)、梅木谷(仁井田)、梅ヶ端(平串)、梅ノ木久保・梅ノ木才能(本堂)、梅ノ木窪(与津地)、梅ノ木川(数神)、梅ノ木ノ岡(飯ノ川)、梅ノ木才(大正)、梅ノクボ(弘瀬)、梅ノ本(大正北ノ川)、梅ノ木窪(市ノ又)、梅ノモト(相去)、梅ノ木谷(大井川)、椀ノ木(地吉)の例。

うるしたに【ウルシ谷】(通称谷川)

土佐松原：33. 271202, 132. 990661

大正中津川の本村集落から上流にひと蛇行した仲が市の北側を流れる谷川。(徳広誠男談)

うるしはら【ウルシハラ】(字)

土佐松原：33. 265595, 132. 993032

本村集落の入口、長防谷が、本村橋の上流 100m 位から中津川に合流するまでの左岸の区域。踏査では、ウルシ(漆)の採取地でなくウチ(打)で削り取られた小平地と考える。

ウシハラ→

おおぎひら【扇平】(字)

土佐松原：33. 268748, 132. 992104

本村集落を囲む北側の裏山。扇の形状から付けられた地形地名か。

おおぎやま【扇山】(山)

「州郡志・下 p 325」の中津川村の山川に『臼杵山 扇山 在村東南』とある。本村集落の東南は成川であり、州郡志の臼杵山(薄木山)を消去すると扇山は成川山、奥成川山となる。成川が城戸木森を源流にして時計周りに下る扇形の形状からも理解できる。

おおあざみ・おおあざめ【大筋・大筋】(一筆限絵図面)

大正中津川の森が内集落の左岸から北峰山と東峰山の間、大薊林道(森林管理署)を城戸木森に向け上る上流域を地元では「アザメ」という。稜線近い最上流部が「大筋」で森林管理署の図面では「大筋山(4019、4020 林班)」。州郡志では「大筋」となっている。最上部の稜線は折合境。字地番がないところから国有林野である。北側は小松尾に接する。

おおあざめりんどう【大薊林道】(道路)

米の川：33. 280557, 132. 997795

大正中津川の森が内集落から「アザメ」に入る国有林を管理する林道。区域の国有林は小筋山(4018)大筋山(4019、4020)木戸木山がある。森林管理署の図面では山は「筋」で林道は「薊」となっている。

おおなるなかつかわせんいちごうはし【大奈路中津川線 1 号橋】(道路)

町道大奈路中津川線(路線番号 20127)が木屋ケ内、大正中津川の境付近で中津川を右岸から左岸に渡る橋。橋梁番号 511。コンク

リート床版橋。延長 10.70m
おおはたやま【大畑山】(山名)
土佐松原：33. 290822, 132. 981504
標高 789.0m。三等三角点。位置は大正中津川△梶原町。松原側に国有林野名として大畑山(4035 林班)がある。

おおひら【大ヒラ】(字)
土佐松原：33. 283167, 132. 997538
大正中津川の森が内集落の左岸、北側の字。

おおやまづみじんじゃ【大山祇神社】(寺社)
土佐松原：33. 269313, 132. 990387
大正中津川の本村集落の北面、扇平の尾根にある神社。全国にある大山祇神社・三島神社の総本社は今治市にある大山祇神社。大山積神(オオヤマツミ)を祀る代表的な神社。「オオヤマツミ」は「大いなる山の神」という意味となる。林業の盛んな中津川地区では特に信仰が厚く、祠は地内に多数ある。

おかのこえ【岡ノ越】(字)
土佐松原：33. 269125, 132. 989196
大正中津川の本村集落の北面、中津川小学校の裏山に位置する字名。仲が市への山越道。

おくい【オクイデ】(通称谷川)
土佐松原：33. 284001, 132. 992560
大正中津川の森が内集落の最上部西側に流れるの谷川。南側支流を「シモイデ」といい北側本流を「オクイデ」と呼ぶ。このオクイデに沿って登る山道が松原往還の森が内分れに通じ、足川への峰越し道となる。最も上段にある田辺英喜宅横が登り口となる。シモイデ→

おくもりがうち【奥森ヶ内】(字)
土佐松原：33. 285225, 132. 99284
大正中津川の森が内集落を登る最上部の字。

おひそのもり【おひその森・ヒソーが森】(通称)
米の川：33. 253421, 133. 031666
大正中津川と窪川・折合を結ぶ尾根越し道に「オヒソ様」と呼ばれる祠があり安産の神様として祀られている。オヒソ悲哀の物語から付けられた地名。標高 700m位の稜線のおひその森周辺は駄場となっている。国有林野名は四十畑山 3070 林班

か

かしたにがわ【カシ谷川】(谷川)
土佐松原：33. 267120, 132. 992404
高知県防災マップHP 登載(422-65-004)。大正中津川で唯一指定されている土石流危険溪流。大正中津川の本村集落の越ノ畝にある

小野川小萩宅の横に流れる谷川。地元では「カシタル」という。樫の樽か。中津川の伝統産業であるドブクロ(萩登・和子登・末子登の銘柄ほか)を想起させる。

かどた【門田】(字)
土佐松原：33. 267528, 132. 990205
大正中津川の本村集落の圃場整備された田が全ての字。田の面積は 2,500 m²くらいある。

『民俗地名語彙辞典 p 228』は門田について『中世土豪の屋敷地前面にあった田畑が門田。住居を中心とした一区画の屋敷地がカドであり、その前面にある田だからカド田であった。』という。門田の字は大正では田野々、打井川、市ノ又、木屋ケ内にみられる。

かどたがわ【門田川】(河川)
四万十町が管理する河川。位置は不明。

かなわぎのうね【金輪木の畝】(通称)
土佐松原：所在地不明

『掻き暑めの記 p 287』に『この間切り材を、其まま小場落しをすると丸太材の木口が木株や岩石に衝突して割れる、そげることがあるので、折角の良材を台無しにするというので、そこの山上へ鉄や「フイゴ」など鍛冶道具まで、担ぎあげて現場で鍛冶をやって直径三尺以上もある丸太の両端木口に合して金輪をつくらして木口にはめこんで、小場をしたということである。その為に木口の割れもなく、山出しが出来た由である。』とある。

かみくぼ【上ミ久保・上クホ】(字・ホノギ)
土佐松原：33. 285369, 132. 993917
大正中津川の森が内集落の上部平坦地。穿入蛇行したような杜がある。田辺由喜男宅周辺の字・ホノギ。地検帳では 19 筆、109 a。屋敷は 2 筆ある。

窪地の地名クボ(久保)は全国的な地名である。山中の平坦地、必ずしも陥没している場所ではない。サコが長三角形であるのに対して、クボは丸みをもった低地。(民俗地名語彙辞典)

『地名用語語源辞典』は「くぼ」について『窪・久保①一般に、周囲より低く窪んだ所②山頂の窪み③尾根のたわみ④山中の小平坦地⑤山と山の間の耕地⑥山間の小部落。クボの語源は諸説ある』と述べる。

がやのき【ガヤノ木】(字)
土佐松原：33. 278144, 132. 993343
大正中津川の本村集落と森が内集落の間の森が内寄りの中津川左岸にある字名。

樫の間伐材や枝は燻して蚊を追い払うために使われた。カヤの語源はこの「蚊遣り」に由来するという説がある。カヤ材でもっとも知られている用途は碁盤、将棋盤で最高級品

とされる。この櫃の産地として名付けられたか。

かやのきたに【カヤノキ谷】(通称谷川)

土佐松原：33. 274628, 132. 993042

大正中津川の本村集落と森が内集落のほぼ中間にある谷川。字名から呼ばれる谷川。

本村集落からの古道は、岡の越から仲が市を通りサバト越をすぎるとカヤノ木谷となる。

ここには「遍路ゴケ」がある。(徳広誠男談)

かわちしんでん【河内神田】(ホノギ)

地検帳の中津河村の中カイチ、地藏院ヤシキの次にでてくるホノギ。名称のとおり河内神社の田か。「惣中作」とあるから出役で耕作したのだろう。

きたみねやま【北峰山】(山名)

土佐松原：33. 285037, 133. 004785

標高 663. 3m。位置は大正中津川・森が内集落の東側。旧大正町と旧窪川町の境にある城戸木森から西に延びる稜線上にある。

きたみねやま【北峯山】(字)

土佐松原：33. 285068, 133. 004801

大正中津川の森が内集落を囲う、大部分が山林。東側に北峰山があり、西側は檮原町の境で稜線上に大畑山(788. 7m)がある。この稜線の一部は下津井にも接し、矢立往還の下津井分れを松原往還にむかうと森が内分れとなり、森が内集落へと下る。

かわちじんじゃ・かわうちじんじゃ【河内神社】(寺社)

土佐松原：33. 265922, 132. 989786

大正中津川の本村集落の対岸、中津川の右岸。字向イ宮に鎮座する当地の産土神。「鎮守の森 p 289」には『旧村社。祭神未詳。永正 15 年(1518) 創立。鳥居を潜って 196 の石段を上った鎮守の森』とある。

「大正町史 p 467」には『祭神・事代主神(ことしろぬしのかみ)。勸請不詳。無格社日吉神社、無格社大元神社、無格社熊野神社、無格社巖島神社 右四社ヲ四十二年三月一日合祭許可』とある。大正町誌には「中津川成川口東峯山無格社巖島神社。中津川越ノ鼻無格社熊野神社」とある。

伝承踊りとして花取り踊りがある。

「南路志 3 巻 p 625」には『中津川村 川内明神サワタリ、大本明神ワキノコエ、三王権現ムカイサカ』と 3 社を記している。

きどき【木戸木】(一筆限絵図面)

成川の左岸上流部。成川の左岸は一帯が国有林野のため字・地番がないが、一筆限絵図面にその地名が記されている。最上部稜線は折合境。城戸木森の一等三角点はこの名と同じか。この上流に大筋山がある。

きどきもり【城戸木森・幾登幾森】(山名)

米の川：33. 284965, 133. 025749

標高 908. 35m。明治 26 年(1893) に選定された一等三角点で点名は「しろとぎもり」。位置は大正中津川△折合。近くに折合大ヒノキがある。

「州郡志・下 p 325」の中津川村の四至として『東限幾登幾』とある。「大正町史 p 115」には『いくのほりいくもり』とルビを振っているが、読みの根拠は示されていない。漢字では城・木・幾が充てられていることからキと読むのが正解だろう。

くきのもり【久木ノ森・岫之森】(山名・字)

「御留山改帳」に記述された御留山。『高さ六町横一二町散林』とある。

大正 12 年には中津川官行斫伐事業所が開設され、久木の森山、薄木山(成川)の伐木が開始され、山元から 2, 414m の軌道を敷設、さらに既設の 4 km の民間軌道を借り上げて大奈路土場に至るものであったという(大正町史 p 238)。「土佐州郡志 p 325」には『岫之森・在村南禁採伐』とある。

くすのきさこやま【楠木佐古山】(字)

土佐松原：33. 253744, 132. 983387

大正中津川の南端、久木ノ森の対岸「朝日山」の下流側。中津川の右岸で木屋ケ内・古味野々境までの山林。最上部に矢立往還がある。

くきのもりやまふうけいりん【久木ノ森山風景林】(山)

土佐松原：33. 258203, 132. 987624

多様な天然木で構成された貴重な森林域。

2001 年(平成 13 年)に旧大正町が「2001 年の森(面積 16 万㎡)」として国有林を購入。付近の記念碑には所在地は久木ノ森 895 番。土地 161, 935. 90 m²。立木 3, 462. 79m³ とある。桧の高齢木、複層林、混合林のモデル林として保護育成された風景林は、未来に伝える貴重な森林として「四万十の水辺・八十八カ所」に四万十川自然再生協議会が指定した。

近くには土佐の名水 40 選の「久木の名水」が湧く。

くぼ・くほ【久保・窪・クボ】(地名用語)

窪地の地名クボ(久保)は全国的な地名である。山中の平坦地、必ずしも陥没している場所ではない。サコが長三角形であるのに対して、クボは丸みをもった低地。(民俗地名語彙辞典)

「地名用語語源辞典」は「くぼ」について『窪・久保①一般に、周囲より低く窪んだ所②山頂の窪み③尾根のたわみ④山中の小平坦

地⑤山と山の間の耕地⑥山間の小部落。クボの語源は諸説ある』と述べる。

町内でも字名としては一番多い地形地名ではないか。大字では、窪川と久保川の2箇所くぼの【クボノ】(字)

土佐松原：33. 272619, 132. 989738

大正中津川の本村集落の上流700mくらい中津川左岸にある字名。小平坦地で穿入蛇行している位置には中津川製品事業所跡がある。

くぼのしも【久保野下モ】(字)

土佐松原：33. 271211, 132. 989835

大正中津川の本村集落の上流700mくらい中津川左岸にある字名。字名のとおりにクボノの下流に位置する。

くぼんたに【クボン谷】(通称谷川)

土佐松原：33. 273785, 132. 986777

大正中津川の本村集落の上流にあった旧中津川製品事業所の対岸、中津川左岸に流れる谷川。矢立往還の下津井分れや西峰山を源流域とする。ヤイロチョウ保護林がある。(徳広誠男談)

くまのす【クマノス】(通称谷川)

土佐松原：33. 290369, 132. 992624

ふるさと林道松原中津川線のトンネルの中津川入口の西側に流れる谷川をいう。(徳広誠男談)

けいかんじゃやまかわてやま【恵官者山川手山】(山名)

貞享元年(1684)年の「御材木積帳幡多郡」に記載。材木の製品明細の細目はない。森林管理署の図面には芳川側に恵官者山(4003林班)があるから芳川の境に位置する。

こうげ【コウゲ】(通称地名)

大正中津川の森が内集落から離れて、右岸最下流に30a程度の田がある。地元ではここをコウゲと呼ぶ。

こしのうね【越ノ畝】(字)

土佐松原：33. 266959, 132. 993139

大正中津川の本村集落南東側山手の字。カシ谷川の扇状地に住家・畑が連なる。

こしのうねはし【越ノ畝橋】(道路)

土佐松原：33. 26703, 132. 992324

町道中津川2号線(路線番号20135)カシ谷川に架かる橋。橋梁番号490。コンクリート床版橋。延長5.00m

こしのうねにごうはし【越ノ畝2号橋】(道路)

土佐松原：33. 267174, 132. 992839

町道中津川3号線(路線番号20136)本村集落の東側のカシ谷川に架かる橋。橋梁番号491。コンクリート床版橋。延長3.50m

こまつお【小松尾】(字)

土佐松原：33. 303327, 133. 00317

大正中津川の最北部。最上部の稜線は禰原町、四万十川第1支川禰原川第2支川中津川の源流点。大部分が国有林野

こまつおかわ【小松尾川】(河川)

四万十町が管理する普通河川。起点、終点は不明。

こまつおやま【小松尾山】(山名)

土佐松原：33. 306828, 132. 998203

標高850.3m。三等三角点。国土地理院2万5千分1地形図に掲載。位置は大正中津川△禰原町。

「御留山改帳」に記述された御留山。『高さ八町二〇間横二里一〇町立木二万四〇三八本、桧二六二〇本、樅七〇九六本、梅一万三四六本、榎二本、松三九六一本、朴一三本、薪六五〇艘荷』とある。

国有林小松尾山林内には木地師の墓もあり木地の駄場というホノギもある。木地師の小屋のあった跡であろう。(大正町誌p528、大正町史p189)

小松尾山学校分収造林地として大正高校と高知営林局が10haの教育の森分収契約。場所は小松尾山22林班へ小班、林道脇に看板がある。

こみののかわぐちせん【小味野々川口線】(道路)

一般県道328号線。起点は大正大奈路の古味野々集落で終点は窪川立西地区の南川口。折合から南川口までは舗装改良されているが、古味野々・折合間は架空の路線となっている。高知県道路表の地図では古味野々から本村集落を経由し成川を通り折合に向う高速道路のような法線を描いている。路線の告示後、今において貫通への期成同盟もなく、功名に走る政治家の為す業か、地名が泣いている。

さ

さくらのとうげ【桜の峠・さくらんたお】(通称)

土佐松原：33. 259297, 132. 981209

矢立往還の古味野々・中津川分れの四又路の鞍部。桜のたお。成川の奥、折合境の鞍部(通称松が峠)と赤良木川の奥昭和北の川境の鞍部を加え「さんたお」と呼ばれる。

標高400m位で、この北側には西峰山(標高482.3m)への急登となることから休憩場所となったのだろう。

さわたり【佐渡・サハタリ】(字・ホノギ)

土佐松原：33. 265321, 132. 990848

大正中津川の本村集落の南側で中津川に架

かるサワタリ橋を渡った右岸の水田。河内神社の入口で茶堂もある。「サワタリ茶堂」には安置仏に加え地蔵院の諸仏を合祭している。矢立往還への登り口。

「地名用語語源辞典」には『①動詞サワタル(渡)の連用形で、「(川の)渡渉点」を意味する地名か。サは接頭語②サワ(沢)・ワタリ(渡)の略か』とある。

「掻き暑めの記 p 140」に『明治6年以降、各村のほぼ中央部に元標が建設された。中津川村の元標は字佐渡に設置されていた。』とある。

「皆山集第8巻地理編 p 313」に諸村元標位置字名に第十六区上山郷上分二の中津川村として「サワタレ」とある。

さわたりはし【サワタリ橋】(道路)

土佐松原：33. 265976, 132. 99072
町道中津川1号線(路線番号20134)が本村集落の中央部から西に進み、中津川に架かる橋。昭和39年頃架橋。橋梁番号4718。コンクリート床版橋(沈下橋)。延長22.20m。幅員2.3m。本村集落と対岸の水田や河内神社、茶堂とを結んでいる。

重要文化的景観の重用構成要素となっている。

しおたに【シオタニ】(通称谷川)

土佐松原：33. 292718, 132. 997216
中津川を森が内集落(ふるさと橋)から中津川林道を1km位上ると対岸が民有林と国有林出ノ谷山4025林班の境となる。その境の谷をシオタニという。

じぞういん【地蔵院】(寺社・字)

土佐松原：33. 268452, 132. 989658
藩政末期まで栄えた上山郷中津川村の寺院。本尊地蔵菩薩。州郡志に本尊文殊とある。明治初期の授業場がここにあった。(大正町史 p 280)

「大正町誌 p 387」に中津川村地蔵院中下授業場の写真がある。また「大正町誌 p 389」には中下尋常小学校の所在地を『中津川村字地蔵院(牛ノダバ)』とあるが、ウシノダバは地蔵院の南東側であり不明のための()書きか。

じぞういんやしき【地蔵院ヤシキ】(ホノギ)

土佐松原：33. 268448, 132. 98962
大正中津川の本村集落のホノギ。字地蔵院と同所。地検帳には9筆、19aで京蔵が全筆耕作し中屋敷も構えていた。付録3→

しもいで【シモイデ】(通称谷川)

土佐松原：33. 283598, 132. 992951
大正中津川の森が内集落のふるさと橋(ふるさと林道松原中津川線)西側の50m先の谷川。南側支流を「シモイデ」といい北側本流

を「オクイデ」と呼ぶ。このオクイデに沿って登る山道が松原往還の森が内分れに通じ、足川への峰越し道となる。オクイデー

しもがやのき【下モガヤノ木】(字)

土佐松原：33. 278655, 132. 99316
大正中津川の本村集落の字。ガヤノ木→

しもだば【下モ駄場】(字)

土佐松原：33. 28384, 132. 993568
大正中津川の森が内集落の字。森が内橋を渡った中津川右岸の北側。集落上段の上久保が円形であるのに対し、谷頭付近の河岸段丘から駄場であり、それも上久保の下流域であるから付けられた地名か。

しゃくしもりやま【杓志森山】(山名)

貞享元年(1684)年の「御材木積帳幡多郡」に記載。材木の製品明細の細目はない。

しょうぶがわたりやま【菖蒲ヶ渡山】(山名)

貞享元年(1684)年の「御材木積帳幡多郡」に記載。材木の製品明細の細目はない。

しんや【新屋】(屋号)

大正中津川の本村集落(越ノ畝)にある田辺和子宅の屋号。明治の縁故林騒動で名をさせた田辺新作氏からこの屋号となったのかは不明。先に音読みの新屋(田辺)が付けられ、後になって訓読みの「アタラシヤ」を井原宅にしたという。

すぎのだん【杉ノ段】(字)

土佐松原：33. 282436, 132. 99455
大正中津川の森が内集落の字。森ヶ内橋を渡った、中津川右岸の田辺吉道宅の裏山

せこつとふち【せこつと淵】(谷川)

土佐松原：33. 257759, 132. 989486
大正中津川の本村集落から中津川を1,400m位下った所で、中津川トンネル北側の久木の森の入口付近。狭い意味の「せこつと」と命名。淵への流れ込みは直角。

た

たいしょーなかつかわ【大正中津川】(大字)

土佐松原：33. 267905, 132. 991347△266
旧大正町の北部。北は標高850m級の稜線が高岡郡梶原町、東は窪川地域、南は芳川、木屋ケ内、西は大奈路字古味野々および下道に接する。地内西部を、北部の山地小松尾から中津川が南流している。ほとんどが山地で国有林が多い。流域に水田、集落が立地。上流域を森が内集落と呼ぶ。中心地は本村集落という。農林業が盛ん。下流域で成川谷が中津川に合流。従前には成川集落があったが現

在は無人。川沿いに町道が通り、バス運行1日3便。地内の町道は1種町道大奈路中津川線(20127)のほか中津川成川線(20133)・中津川1号線~8号線・森ヶ内線(20138)・久木ノ森線(20165)等があり、森が内から上流は林野庁が管理する中津川林道が町境の標高875mの春分峠にのび窪川地域に通じて、梶原町松原地区へはトンネル等が新設され国道よりはるかに立派なふるさと林道松原中津川線が通じた。国有林1,534haがある。国有林野事業が盛んな頃は中津川担当区事務所・製品事業所、商店があった。河内神社、大山祇神社、茶堂がある。平成22年、農家民宿はこばの田辺客子さんは「農林漁家民宿おかあさん100選」の第1回選定者となった。四万十町一番目のどぶろく特区で清酒を醸造している。森が内集落から大正まで17.6kmの地。平成18年の町村合併時に地内に2か所の大字となることから名称を中津川から大正中津川に改めた。

「農家民宿はこばの四季(山崎眞弓著/平成26年度高知県出版文化賞)」は、『「はこば」と中津川は、「ただいま」と帰ってこれる、魅力的な「ふるさと」だ』と語り、当地の地域力を四季の移ろいとともて愛情をこめて描いている。

地区内の字は次のとおり。(ア順)

アイビヤ、朝日山、(井手ヶ谷)、ウシノダバ、薄木、畝ノ鼻、梅ノ木才、ウルシハラ、扇平、大ヒラ、(大平山)、岡ノ越、奥森ヶ内、門田、上ミ久保、ガヤノ木、北峯山、(久木ノ森)、(楠木佐古山)、クボノ、久保野下モ、向佐渡、越ノ畝、(小松尾)、佐渡り、地藏院、下モガヤノ木、下モ駄場、杉ノ段、タカノ畝、高藪、長坊谷、長ボヲ、ツルイノ本、仲ケ市、仲ケ市山、中屋敷、成川、西峰山、西峯山、ニタゴ松、ニタ子松山、仁ノ畝、東ノ前、東峯山、向ダバ、向イ宮、森ヶ内山、横平、横平山、六郎北平、六郎谷、六郎谷ノ下モ【48】

地区内のホノギ(長宗我部地検帳)は次のとおり。(上流森ヶ内から成川まで)

中ヤシキ、宮ノワキ、上クホ、タカヤフ、中カイチ、地藏院ヤシキ、河内神田、なり田、ツルノモト、むろや、林上、ウシハラ、サハタリ、成川【14】

寛保3年に編纂した「御国七郡郷村牒」では、『石高83,182石、戸数30戸、人口123人、男62人、女61人、馬10頭、牛2頭、猟銃4挺』とある。

「郡州志・下p325」での四至は、『東限幾登幾森西限矢立坂南限臼杵北限津野山松原村東西四十五町南北一里■二十三其土黒』とあ

り、山として『大筋山、小筋山、成川山、岫之森、小松山、井出谷、臼杵山、扇山、成川谷、小松谷』とあり、寺社として『地藏院、川内大明神、大元大明神』とある。

だいぞうだば【大蔵駄場】(通称)

土佐松原：33.257225,133.00839

大正中津川の旧成川集落に最後まで残った住人が林大蔵であった。これにより大蔵駄場と言われるようになった。

たかのうね【タカノ畝】(字)

土佐松原：33.283689,132.996355

大正中津川の森ヶ内集落の左岸、ふるさと橋の付近に金刀比羅宮(祭神大物主神)の境内跡がある。

たかのとうげ【鷹の峠】(通称)

松原往還は大畑山の南側の鞍部から森ヶ内分れとなる。この鞍部を鷹の峠という。この峠の反対側は大正と梶原の境となる足川川。

たかやぶ【高藪】(字)

土佐松原：33.281557,132.997779

大正中津川の森が内集落の字。中津川の左岸、あざめの谷川口右岸の小平地

たぬきうど【たぬきうど】(通称)

土佐松原：33.260338,132.984985

大正中津川の久木の森から500m下った所。淵ではないが巨石の形が「狸が腹ずみを打っている」ように見える。付録7久木の森マップ→

たのこしやま【田之越山】(山名)

貞享元年(1684)年の「御材木積帳幡多郡」に記載。材木の製品明細の細目はない。

だば【駄場】(地名用語)

「地名用語語源辞典」では『駄場①山中にある平坦地(四国各地の方言)タバと同じ地名か②草木の生い茂った所。やぶ③芝地』

「民俗地名語彙辞典」では『駄場と書き四国山地に多い地名。特に高知、愛媛県境に多く分布。実例からみて平坦地を意味する地形地名。四国に多いナロ(奈路、奈呂)と同様な地形。駄場地名は山地の高所よりも、谷筋に最も多く見出され、小盆地状をなし、ささやかな水田を営むような場所である。谷頭付近の窪地、河岸段丘にも少なくない。』

大正中津川には「ウシノダバ」、「下モ駄場」、「向ダバ」の字があり、通称地名では「大蔵駄場」、「茶沸し駄場」、「土俵駄場」がある。

旧窪川町には54箇所、旧大正町には75箇所、旧十和村には51箇所の字がある。

大正の柵無手無冠がつくる栗焼酎の銘柄名は「ダバダ火振り」である。四万十川流域では古来より伝統的鮎漁法に、夏の闇夜にたいまつを振り、鮎を定置網に追い込む「火

振り漁」がある。また四万十川流域の暮らしの中で山里では人の集まる場所を「駄場（ダバ）」と呼んでいた。この2つがネーミングの由来で、命名者は小野川小夜子。余談だが、痢の酒「だれやすけ」の命名者は武内文治

ちゃどう【茶堂】（施設）

大正中津川には、2箇所の茶堂がある。森が内集落は向ダバに、本村集落はサワタリにある。

「大正町史 p 157」には『四国各地の村々には、道筋などに茶堂と呼ばれる建物が多くみられる。旧往還山越しの麓にあるのが通例である。田野々往還、瀬里越しのふもとの轟崎、芳川越えの市ノ又の坂元、針木のゆる谷口、大奈路矢立越の麓などが、その代表的なものである。上山郷の茶堂の起源は慶長のころからと考えられている。茶堂は村人たちの弘法大師への信仰の場であると同時に、旅人たちをもてなす「おせったい」の場として、他郷の人々との情報交換の場として大きな役割を果たしてきたのである』とある。

茶堂は、今風のコミュニティーカフェ。

ちやわかしたば【茶沸し駄場】（通称）

米の川：33. 252263, 133. 026248

大正中津川の成川から窪川・折合を結ぶ尾根越し道の稜線上の村境。藩政時代の山廻り役人の送り迎えの地点で、中津川村の山番や地下役人が羽織袴で出迎え草鞋弁当を用意し、焚火で茶を沸かしたところから呼ばれた地名。（徳広誠男談）

ちょうぼう【長ボヲ】（字）

土佐松原：33. 266577, 132. 994904

大正中津川の本村集落に所在する字名。東峰山を源とする本村集落の南側に流れる長坊谷の本村集落あたりを呼ぶ。

ちょうぼうだに【長坊谷】（字）

土佐松原：33. 26629, 132. 995118

大正中津川の東峰山を源とし、本村集落の南側で中津川に合流する谷川周辺の字。

つえたて【杖立て】（通称）

大正中津川の成川を遡上し窪川の折合・桧生原に通じる尾根越し道の稜線にあるところ（徳広誠男談）。山越えが終わり一息つくために杖を立てたところから付けられたのか。眺望もよく風の流れもよい稜線の平坦地となるところと思われる。

つなうちのだん【綱うちの段】（通称）

「掻き暑めの記 p 140」に『この山はあまり、急傾斜の山で元切り間切りの際に材の切り離しをやると、すぐ谷底まで落込んで取り出しに困難するというので、間切り材を綱でく

り止めて切り離し、適当な位置まで吊り下げでは集材をしたということである。』とある。

つるいのもと【ツルイノ本】（字）

土佐松原：33. 268506, 132. 991138

大正中津川の本村集落の北側の字。住居家屋が連なる。

「地名用語語源辞典」にはツルは『①細長く曲がった所。鏡味氏は「水路のある低地」と説明している。ツルは「細く長く屈曲した状態をいう。』。イは『④高くそびえた所⑤井（井）で「水を汲み取る所』』とある。

当地の住家は細く屈曲した形状であり、長防谷やカシ谷川をいったん上流側に水路で引込み、当地で田の水利として分配したことから付けられた字か。

つるのもと【ツルノモト】（ホノギ）

土佐松原：33. 268506, 132. 991138

大正中津川の本村集落の北側のホノギ。地検帳では24筆、110 a。屋敷が2筆ある。字と同地。

とちだにばし【栃谷橋】（道路）

土佐松原：33. 293539, 133. 002768

大正中津川の森が内集落を起点とした中津川林道（森林管理署管理）を1.8 km先に進んだあたりにある橋（昭和39年11月架設）。森が内集落の民有地と国有林小松尾山（4021林班）の境にある。

どひょうだば【土俵駄場】（通称）

大正中津川の本村集落・長防谷から尾根越しで中土佐・久礼にむかう旧道がある。木材を肩荷で搬出する重要なルートで、その途中に土俵駄馬がある。（徳広誠男談）

とちだにりんどう【栃谷林道】（道路）

土佐松原：33. 29501, 133. 002307

中津川林道から分岐した林道。小松尾山国有林の4021林班が区域となる。入口には「昭和58年・栃谷林道・施工（有）井原組・高知営林局大正営林署」とある。

な

なか【ナカ・中】（屋号）

大正中津川の本村集落では、徳広宅を「ナカ（屋号）」と呼んだという。対となつてあるのが「オモヤ」。意味は不明だが、八足にもナカ・オモヤがあり、本村集落だけの屋号・呼び名ではない。田辺和子宅を「シンヤ（新屋）」、井原宅を「アタラシヤ（新屋の訓読み）」、林真次宅を「インキョ」、小野川清美宅を「東」と屋号で呼ばれた。農家民宿はこばも郵便の

拠点であったことから「函場（はこば）」の屋号となった（徳広誠男談）。屋号→

なかがいち【仲ヶ市・中カイチ】（字・ホノギ）

土佐松原：33. 27126, 132. 991117

地検帳の検地は、下津井村から森河内村に越して中津河村の「中カイチ」から始まっている。現在の字名と同所。序論・中津川の地名考→

なかがいちやま【仲ヶ市山】（字）

土佐松原：33. 272112, 132. 991621

大正中津川の本村集落の字。仲ヶ市の裏山。

なかかわうちやま【中川内山】（山・国有林）

米の川：33. 245467, 133. 017225

標高 695. 7m。3 等三角点。位置は大正中津川△芳川。旧成川集落から折合への峰越道を成川山（民有地と 4015 林班の境）へ登ると芳川境の稜線にでて古宿杉の尾林道からの峰越道と合流する。この合流点を古宿側に転じれば程なく中川内山となる。芳川川の源流域が国有林野・中川内山（4005, 6, 7, 10, 11 林班）である。

なかつかわ【中津川】（河川）

渡川水系 1 次支川梶原川 2 次支川中津川（一級河川）。左岸大正中津川字森ヶ内山 702-4・先右岸北峯山 611-33 先、流路延長 12, 100m。松葉川地域の窪川中津川集落に流れる河川は中津川川（一級河川）

なかつかわむら【中津川村】（郷村）

長宗我部地検帳（1597 慶長 2 年）では森河内村と中津河村の二つに分けて検地している。藩政時代の中津川村は、大奈路三ヶ村庄屋の支配下にあり、名本が置かれていたが、役宅は字ウシノダバ（島崎家宅）であった。流域に「本村」と上流域の「森ヶ内」、下流域の「成川」の集落が存在していた。（大正町史 p 114）

総地高 48 石 5 斗 4 升 7 合

戸数 26 人口 148

明治 4 年（1871）9 月、区制が施行。上山郷上分は第 5 区と第 6 区に区分され、中津川村は幡多郡第 6 区 18 村に構成された。

明治 8 年（1875）4 月、大小区政が施行。中津川村は第 16 大区第 2 小区となった。

市制・町村制は明治 22 年 4 月 1 日施行。旧大正町の前身である東上山村は中津川村を含む 22 か村が合併して発足した。東上山村の初代村長は富田可茂（井崎出身）

中津川の地名の由来は、序論に記載した。

なかつかわいせき【中津川遺跡】（遺構・遺跡）

大正中津川・本村集落の中央部に位置する字ウシノダバ他の河岸段丘、東西 120m 南北 350m から縄文土器片（縄文後期）から出土。

なかつかわおおはし【中津川大橋】（道路）

土佐松原：33. 256072, 132. 986267

町道久木ノ森線（路線番号 20165）が中津川に架かる橋。橋梁番号 522。鋼桁橋。延長 24. 50m。中津川橋・中津川トンネルが完成するまで、中津川の右岸を通る町道大奈路中津川線が初めて左岸に渡ることとなる橋で、当時、完成を喜び「大橋」としたもののだろう。今ではこのはるか上空を渡る橋が「中津川橋」である。旧道（新たに町道久木ノ森線となる）となった橋は、力むことなく高欄も苔むしている。

なかつかわしょうがっこう【中津川小学校】（施設）

土佐松原：33. 268318, 132. 989346

明治以来の学校制度を経て、昭和 22 年学制改革により中津川小学校と改称。昭和 34 年には 69 人を数えた児童も平成 7 年にはわずか 5 人となり、平成 8 年休校し大奈路小学校へ編入された。平成 17 年閉校（大正町史 p 415）。「続ける人は偉い」が校是。

休校した年に「電脳中津川小学校」というネット上の仮想の小学校が開校。運営する電脳用務員は野崎賢也さん、畑俊八さんほか。その学びと交流の場は形を変えて今も息吹いている。

なかつかわとんねる【中津川トンネル】（道路）

土佐松原：33. 256063, 132. 987973

大正中津川の南部、久木の森をくぐる町道大奈路中津川線のトンネル。木屋ヶ内との境はすぐそこ。昭和 60 年（1985）年 1 月開通。長さ 162. 1m、幅 7. 5m、高さ 6m。開通により、1. 6 km 迂回していた距離がわずか 200m に短縮された。

なかつかわはし【中津川橋】（道路）

土佐松原：33. 255794, 132. 987544

町道大奈路中津川線（路線番号 20127）が穿入蛇行する中津川にそって走る町道を最短で結ぶためトンネルとともに開設された橋。橋梁番号 4734。混合橋。延長 67. 2m。

なかつかわはし【中津川 2 号橋】（道路）

土佐松原：33. 253398, 132. 986932

平成 25 年 9 月竣工。町道大奈路中津川線（路線番号 20127）の新たなルートとして中津川左岸に架けられた橋。同時（同年 10 月）に開通した中津川 1 号橋（平成 17 年 10 月竣工）は木屋ヶ内地区内にある。

なかつかわぶんだん【中津川分団】（施設）

土佐松原：33. 268362, 132. 989743

昭和 45 年（1970）に中津川分団が発足。林野消防から公設消防に移行し大正町消防団 5 分団の一つとなった。分団員 15 名。

平成 26 年度、新分団屯所が防災拠点として旧中津川小学校校舎跡に完成。

なかつかわなるかわせんいちごうはし【中津川成川線 1 号橋】(道路)

土佐松原：33. 260383, 132. 993123

町道中津川成川線(路線番号 20133)の始点からほど近い、通称ウスギに架かる橋。橋梁番号 519。コンクリート床版橋。延長 5. 20 m

なかつかわなるかわせんにごうはし【中津川成川線 2 号橋】(道路)

土佐松原：33. 256247, 133. 000751

町道中津川成川線(路線番号 20133)が 4014 林班に入っところ通称コバタン谷に架かる橋。橋梁番号 520。コンクリート床版橋。延長 5. 40 m

なかつかわなるかわせんさんごうはし【中津川成川線 3 号橋】(道路)

土佐松原：33. 256705, 133. 005236

町道中津川成川線(路線番号 20133)が旧成川集落の手前の通称ハタン谷に架かる橋。橋梁番号 521。コンクリート床版橋。延長 6. 10 m

なかつかわはちごうせんいちごうはし【中津川 8 号線 1 号橋】(道路)

土佐松原：33. 278893, 132. 998742

町道中津川 8 号線(路線番号 20173)通称ツエダニ付近、あざめ谷の右岸から左岸に渡る橋。橋梁番号 509。コンクリート床版橋。延長 7. 50m

なかつかわはちごうせんにごうはし【中津川 8 号線 2 号橋】(道路)

土佐松原：33. 277063, 133. 004884

町道中津川 8 号線(路線番号 20173)小あざめ谷を渡る橋。橋梁番号 510。コンクリート床版橋。延長 7. 60m

なかつかわりんどう【中津川林道】(道路)

米の川：33. 284091, 132. 99565

大正中津川の森が内集落から北側の春分峠(梶原境)へ向かう国有林を管理する基幹林道。域内の国有林は、出ノ谷山(4025)、小松尾山(4021, 4022, 4023, 4024, 4026, 4027, 4028)がある。支線として栃谷林道、中津川林道 23 支線(昭和 56 年度)がある。

なかやしき【中屋敷・中ヤシキ】(字・ホノギ)

土佐松原：33. 281387, 132. 994389

大正中津川の森が内集落の字、ホノギ。位置は、森が内集落の下手で中津川の右岸。地検帳は、下津井村の検地をソウカイ、イノ、で終了し、足川を越えて森河内村に入る。森河内村最初の検地が峰越し道を降りついた場

所である、この中ヤシキ。昔の名本宅か。現在の林貞一宅周辺の宅地、農地。

なりた【なり田】(ホノギ)

現在の字名である本村集落の「門田」(小学校前の圃場整備された田)の位置か。地検帳では、中津河村の中カイチから始まり、地藏院ヤシキ、河内神田の次に「なり田」として 25 筆検地し、ツルイノモトに移っている。

ナルは『山裾の傾斜の緩い所。中国、四国にかけて平地をいう。ナルはナラ、ナロと同源。高知県では奈呂、奈路など二字で表すのに対して、愛媛県はナルを成の字を宛てるが、東予では平の字がめだつ。』(民俗地名語彙辞典)

成田は『業田すなわちその一家の生活のよってたちゆく田の意味ではないか』という。ナル(成、生)という意味か、ナリワイ(生業、職業)の意味かナル(鳴)の意味か実際に調査しないと決められない。(地名語源辞典)

いずれにしてもこの地域の一番の田であったことだろう。

ちなみに「民俗地名語彙辞典 p 228」は門田について『中世土豪の屋敷地前面にあった田畑が門田。住居を中心とした一区画の屋敷地がカドであり、その前面にある田だからカド田であった。』という。門田の字は大正では田野々、打井川、市ノ又、木屋ケ内にみられる。ホノギではみあたらない。

なるがわ【成川】(字・ホノギ)

土佐松原：33. 257019, 133. 008589

大正中津川の旧成川集落の左岸。最上部の稜線は芳川、折合境となる。成川の上流に奥成川。田畑のある成川集落跡の他は大部分が国有林野である。

成川山国有林(4015、4016 林班)、奥成川国有林(4017 林班)

「大正町誌 p 495・497」には天理教拝殿の献木として『中津川鳴る川国有林から桧丸太素材 35 尺 40 尺末口径 1 尺 5 寸より 2 尺迄 21 本』とある。町誌には材搬出の様子が詳細にわたって書かれている。天理教が当時の芳川からの搬出を記録した貴重な映像もある。

なるかわ【成川】(河川)

土佐松原：33. 261168, 132. 990934

渡川水系 1 次支川梶原川 2 次支川中津川 3 次支川成川。城戸木森を源流とし、東峯山の南側を時計回りに流れ中津川に合流する。町管理河川。延長 3. 0 km。流域面積 6. 0 km²。

なるかわばし【成川橋】(道路)

土佐松原：33. 261563, 132. 990698

町道大奈路中津川線(路線番号 20127)が成川を渡る橋。橋梁番号 483。コンクリート

床版橋。延長 13.7m。橋名板には「成川橋・昭和 35 年 11 月架設・なるかわばし」とある。地元では「なるがわ」と濁音で呼ぶ。

なるかわはし【成川橋】(道路)

土佐松原：33. 256651, 133. 007757
町道中津川成川線（路線番号 20133）が旧成川集落のすぐ南西側、通称宮ノ谷に架かる橋。橋梁番号 522。混合橋。延長 10.4m。

なるがわやま【成川山】(山名)

「御留山改帳」に記述された御留山。『高さ七町横一九町立木三八九本、桧三〇本、樅五四本、梅三六本、松二六九本、薪五〇艘荷』とある。

なるがわりんどう【成川林道】(道路)

米の川：33. 258615, 133. 000199
大正中津川の成川の左岸一帯の国有林を管理する基幹林道。森林管理署の図面では 4013 林班と 4014 林班の境を起点としているが、町道中津川成川線は旧成川集落（770-15 先。成川山 2016 林班境）を終点としている。域内の国有林は、薄木山（4013, 4014）成川山（4015, 4016）奥成川山（4016, 4017）がある。支線として成川林道 14 支線、成川林道 15 支線、成川林道 16 支線がある。

なる【奈路・奈呂・ナロ】(地名用語)

「地名用語語源辞典」でナロを『成・奈呂・奈路①山などの平坦地（愛媛県、高知県の方言）②ナリ（鳴）の転で、音響による地名もあるか。なる（平）の転で平坦地。緩傾斜地』

「民俗地名語彙辞典」ではナロを『土佐西部でナルのこと。一般的に四国ではナルを使う。土佐にはナロという地名が多くあるが、高知県や愛媛県で山中の平坦な所をいう。元来、山麓の緩斜面をいうことばだが、こうした傾斜地に集落ができ、やがて地名になった。これに対し、平坦なところはダバ（駄場、駄馬）といった。』

町内に大字で東大奈路、奈路、大正大奈路の 3 地区。字名では非常に多い。

中津川地区にはダバはあるが奈路はない。平は、扇平、大ヒラ、横平、六郎北平とある。中津川地区では奈路の代わりに平を付けたのか。

にせんいちねんのもり【2001 年の森】(施設)

土佐松原：33. 257252, 132. 987104
生態系を重視した森林保存区とすることを目的に、平成 13 年 2 月中津川・久木の森を 9600 万円で国から購入した。設置条例名が「2001 年の森設置条例」。

にしみねやま【西峰山】(山名)

土佐松原：33. 270067, 132. 977298
標高 718.3m。三等三角点。位置は古味野々

△大正中津川。山の中腹、中津川側に矢立往還がとおる。矢立往還の里程は起点の大奈路大駄場茶堂から 5.5km で、下津井分れまで 1km 程度。大正中津川の本村集落にあるサワタリの茶堂から 400m 位登ると鉄巖坊の小祠が鎮座する（大正町史 p 119）。

安芸の吟遊詩人・川村与惣太がこの地を立ち寄った折に詠んだ歌が『かり人の矢立の森を分け行けば妻 こもるとや鹿ぞ鳴なる』。下津井温泉の庭に歌碑がある（校注土佐一覽記 p 366）。この「矢立の森」が今の西峰山といわれる。

にしみねやま【西峰山・西峯山】(字)

土佐松原：33. 272628, 132. 98153
大正中津川の西側。本村集落から森が内集落までの中津川の右岸の山林。頂部は櫛原川と中津川の分水嶺の稜線が続き矢立往還を通じる。最高点が西峰山（718.0m）で字名となっている。

頂部は国有林野であるが多くは民有林で、平成 21 年、22 年には渡邊基金により（公社）生態系トラスト協会のヤイロチョウの森渡邊保護区（西峰山 734-1 他 2 筆 553, 090 m²）が設定された。

にたごまつ【ニタゴ松】(字)

土佐松原：33. 282436, 132. 996878
大正中津川の森が内集落の字。林幸一宅の裏山。小さい字である。

にたごまつやま【ニタ子松山】(字)

土佐松原：33. 281754, 132. 996417
大正中津川の森が内集落の字。森ヶ内橋の左岸周辺の山。

にのうね【仁ノ畝】(字)

土佐松原：33. 283333, 132. 992951
大正中津川の森が内集落の字。ふるさと橋を渡った中津川右岸東側。「シモイデ」谷の周辺の山林。

は

はこば【函場】(屋号)

土佐松原：33. 266515, 132. 991245
明治 7 年（1874）、高知県内に 78 箇所郵便取扱所が増設され、田野々郵便取扱所が大正（田野々）字久保屋敷に設置された。配達物の拠点として町内 10 箇所に「函場」が設置された。当時の中津川は田辺幸吉宅。現在地となる農村民宿「はこば」の屋号はここから採られた。山崎眞弓著の「農村民宿はこばの四季」は田辺荘市・客子夫婦の生き方や中

津川の暮らしが綴られている。第 59 回（平成 26 年度）高知県出版文化賞受賞。

はちののぐち【八野の口】（通称）

土佐松原：33. 270708, 132. 977791

矢立往還の最高地点である西峯山の手前 50 mほどのところのある湧水・泉。

「大正町誌 p 556」には『この泉は昔弘法大師が巡礼の途中そまつな身装でこの坂に通りがかりのどかわいて苦勞していたとき、たまたまこの近くに草かりに来ていた中津川部落の百姓が一滴のひょうたんの水を与えたとに感謝して地中に杖をさし入れて永久に恵の泉を湧かせたとの伝説が残っている。』とある。

「掻き暑めの記 p 297」に『矢立坂の「はちののぐち」まできたころ二匹の山犬がごっそり出て来て、多仲の着物の裾を食わえて往還下の草の中に引っぱりこんだ。多仲は山犬の為すに委せていたところ二匹の山犬は多仲を後にかばう様にしている。その前を魔物は大きな地響をして通ったが、幸に魔物の害は受けることなく、そのあとから二匹の山犬の手引きに依って大奈路舟戸渡場まで帰りついた。』とある。

はやしのうえ【林上】（ホノギ）

大正中津川の本村集落のホノギ。位置・読みとも不明だが、検地の順路が、なり田、ツルイノモト、むろやの次がここであるから、越ノ上のあたりか。筆数 19、田畠屋敷で 795 a。屋敷が 2 筆ある。

ひがしのまえ【東ノ前】（字）

土佐松原：33. 266039, 132. 991814

大正中津川の本村集落の字。長防谷の河口右岸、町道の沖。主は田畑。

ひがしのまえはし【東ノ前橋】（道路）

土佐松原：33. 26658, 132. 991704

サワタリ橋へ向かう町道中津川 1 号線（路線番号 20134）がカシ谷川を渡る橋。橋梁番号 489。コンクリート床版橋。延長 4. 40m

ひがしみねやま【東峰山】（山名）

土佐松原：33. 271323, 133. 000848

大正中津川・本村集落の東、多くは民有林。標高 618. 8m。三等三角点。山名は東峰山であるが、字名は東峯山となっている。

ひがしみねやま【東峯山】（字）

土佐松原：33. 266519, 133. 002055

大正中津川の字。東峰山（618. 8m）を中心にして、南は成川の右岸を境とし、西は成川口、本村集落から森が内集落にかけた中津川左岸を境とし、北は森が内集落あざめの川の左岸を境とする。

ふくとくじんじゃ【福德神社】（寺社）

「大正町史資料編 p 120」には『福德様（二

子松山）元は竹内家に祀られていたといわれるが現在は中津川左岸、町道の上方に小祠』とある。

「鎮守の森 p 295」には『祭神は不明。平家の落人を祀るとか』とある。福德神社は、江戸時代に富くじの発行を許された数少ない社寺の一社という。めでたい社名であるが縁起はわからない。

ふるさとぼし【ふるさと橋】（道路）

土佐松原：33. 283432, 132. 994797

ふるさと林道松原中津川線の起点となる大正中津川・森が内集落に架かる中津川を渡る橋。橋名板には「ふるさと橋・中津川川・平成 12 年 1 月完成・ふるさとぼし」とある。河川管理者である県が河川名を 2 次支川中津川と定めているのに、窪川中津川の河川名である中津川川と刻んでいる。

べらいてんふち【べらいてん淵】（通称）

土佐松原：33. 261755, 132. 990414

大正中津川の本村集落から中津川を 800m 位下った所で、成川が中津川に合流する付近。昔岩の上に弁財天様の祠があった。岩と道の間でできた池に石を投げると血の雨が降ると言われた。弁財天は元来インドの河神であることから、日本でも水辺、島、池など水に深い関係のあった場所に祀られる。日本三大弁財天のひとつが宮島厳島神社の神宮寺である。

ベンザイテンがベライテンに転訛したのは森林軌道を敷設する三浦木材の人夫によるものという（徳広誠男談）

ほばしらふち【ほばしら淵】（通称）

土佐松原：33. 25799, 132. 988056

大正中津川の久木の森風景林のすぐ上流部にある淵。舟の帆柱のように見える長い姿全体をいう。

ほんむらはし【本村橋】（道路）

土佐松原：33. 265844, 132. 992729

町道大奈路中津川線（路線番号 20127）が本村集落へ入る口、長防谷に架かる橋。橋梁番号 484。昭和 35 年竣工。コンクリート床版橋。延長 9. 30m。橋名板は終点左側に「本村橋」とある。

ま

まつばらなかつかわとんねる【松原中津川トンネル】（道路）

土佐松原：33. 290351, 132. 99359

大正中津川と松原の境を貫くふるさと林道松原中津川線のトンネル。2003 年 7 月完成。

延長 1,487m。幅 7.0m、高 4.5m。大奈路・松原間が近くなり、酷な道である下津井経由の 439 号線を避けてこの道を利用する人が増えた。

まきうねやま【楨畝山】(山名)

貞享元年(1684)年の「御材木積帳幡多郡」に記載。材木の製品明細の細目はない。場所も不明で、州郡志にもその名がないことから小さなやまであろう。

みまやま【美馬山】(山名)

土佐松原：33.259356, 132.988166

地名は三角点の名称。標高 313.1m。4 等三角点。位置は大正中津川・久木の森風景林中心部の北側、対岸

みやがたに【宮が谷】(通称)

米の川：33.257247, 133.008379

大正中津川の旧成川集落の川沿い。宮があったところから「宮が谷」となったのか。こちらの神社が歴史があったと言うが、本村集落の河内神社に合祀された。(徳広誠男談)

みやのわき【宮ノワキ】(ホノギ)

森河内村の検地は、中ヤシキ、宮ノワキ、上クホの順である。宮ノワキは、下畠 1 筆のみで、作は市大夫であることから、中津川の右岸、「宮」とあることから旧竹内家住宅のあった周辺か。

むかいさわたり【向佐渡】(字)

土佐松原：33.264702, 132.990516

大正中津川の本村集落の全景が望める町道大奈路中津川線の集落の手前、中津川の左岸。名のとおり佐渡の向いにあたる。

むかいだば【向ダバ】(字)

土佐松原：33.279557, 132.993724

大正中津川の森が内集落の入口、中津川左岸の小平坦地。茶堂もある。現在は荒れているが、地検帳では田畠屋敷で 109 a あり、2 軒が居住していたとある。ダバ→

むかいみや【向イ宮】(字)

土佐松原：33.265931, 132.989593

大正中津川の本村集落の南側、中津川の右岸。中津川地区の産土神、河内神社が鎮座する境内地の字。河内神社→

むろや【むろや】(ホノギ)

大正中津川の本村集落のホノギ。11 筆、36 a で下屋敷が 3 筆含まれる。ツルノモト(ツルイノ本)の次に検地されているからウシノダバ辺りとなるか。それも畠が田に比較して多いことから山手側となるか。ムロは麴室の意味もあることから、「萩登」、「和子登」が醸造される越ノ畝辺りかもしれない。付録 3→
もりがうちかわ【森ヶ内川】(河川)

四万十町が管理する河川。延長 1.0 k m。
流域面積 0.5 k m²

もりがうちばし【森ヶ内橋】(道路)

土佐松原：33.281622, 132.995706

町道森ヶ内線(路線番号 20138)が右岸の森が内集落へ渡る橋。橋梁番号 4747。I 桁鋼橋。延長 31.00m。橋名板には「森ヶ内橋・中津川・平成 2 年 10 月完成・もりがうちばし」とあり、親柱にはこころしく猪の絵が描かれている。

もりがうちやま【森が内山】(山名・字)

土佐松原：33.286295, 132.99452

大正中津川の中津川右岸、ふるさと橋を渡った森が内集落の北側の山。標高 360.1m。4 等三角点。ふるさと林道松原中津川線から山容の全体が見える。

や

やきおやま【屋気尾山】(山名)

貞享元年(1684)年の「御材木積帳幡多郡」に記載。材木の製品明細の細目はない。州郡志にも山名はなく、所在不明

やごう【屋号】(地名用語)

江戸時代、苗字を名乗ることができなかった農家の人が、同一地域内で同じ名を持つものが増え、人別ができなくなり不便となったため家ごとに名称を付して人の判別のしるしとしたのが「屋号」。明治以降も家の地位・所在地・特徴などを屋号としていることから集落の歴史を示す記号でもある。現在では地区内で高齢者には使われる場合があるが、すたりつつある。

大正中津川地区には、「ナカ」「オモヤ」「シンヤ(新屋)」、「アラタヤ(新屋の訓読み)」、「インキョ」「東」「函場(はこば)」「西」「カシダル」「オラバイ」等の屋号がある。ナカ→

やたておうかん【矢立往還】(道路)

大正大奈路の大ダバを起点として、梶原川と中津川の稜線を荷馬がとおれるくらい緩やかに往来できる街道で各集落に「分れ」の道があり、行くことができる。松原往還へとつながる。大正大奈路-1.0 k m-八足分れ-0.6 k m-木屋ヶ内(赤岩)分れ-2.4 k m-0.1 k m 中津川分れ-2.4 k m-下津井分れ-3.8 k m-下津井番所跡。

大正町誌の第 11 章通信・交通・運輸の発達 p 554 には田野々からの奥又の往還として詳しく書かれている。

南路志 1 巻 p 495 に「中村より上山之内下

津井村迄拾貳里山道 中村より大奈路迄牛馬通、夫れより不通」とあり、この道程の章では道を大道筋、山道・小道、灘道と区分しており、矢立の道は「山道・小道」に掲載している。矢立往還と名付けたのは、近年の懐古趣向によるところか。

「地名用語語源辞典」は往還を『①近世、伝馬の制のある本街道のこと②街道。大通り』とある。

よこひら【横平】(字)

土佐松原：33. 264716, 132. 988182

大正中津川の本村集落の対岸、河内神社の西側。矢立往還への登り口。南には横平山の字がある。

よこひらやま【横平山】(字)

土佐松原：33. 262096, 132. 988654

大正中津川の本村集落の対岸。中津川のサワタリ橋をわたり矢立往還の中津川分れの登りつけの山林。鉄巖坊の祠がある。北側の山林は河内神社の鎮守の森

ら

ろくろうきたひら【六郎北平】(字)

土佐松原：33. 270224, 132. 98859

大正中津川の本村集落の字。仲ヶ市の対岸、中津川右岸。

ろくろうだに【六郎谷】(字)

土佐松原：33. 268576, 132. 987477

大正中津川の本村集落のすぐ上流、畝ノ鼻の西側対岸の字。中津川の右岸。六郎谷は「ロクロ谷」とも読める。このあたりは木地師の材料となる栃の木の植生もみられることから栃の木の採取地若しくは作業場があり、木地師の大切な道具であるロクロにちなんで名づけられたのか。

ろくろうだにのしも【六郎谷ノ下モ】(字)

土佐松原：33. 267826, 132. 988212

大正中津川の本村集落対岸、河内神社の北側の川沿いの山林。

わ

わるば【悪場】(通称)

土佐松原：33. 278153, 132. 993182

大正中津川の森が内集落の右岸最下流に一せまち(30a程度)の田(地元ではコウゲと呼ぶ。)があるが、その町道側左岸に位置する。

字向ダバの下流。急峻な地形からワルバと呼び注意喚起したのだろう。



語らない自然数の橋



意味は地元に関け



いのちの道は引越しの道



オープンカフェ「茶堂」



ネーミングは馬から落馬的



トワイライト中津川

引用資史料・参考文献

1. 見出し語の採択となった資史料について

○ 見出し語引用資史料

《共通》

町村制＝土佐州郡志・御国七郡郷村牒

大字・字＝四万十町税務課土地台帳・一筆限絵図面

ホノギ＝長宗我部地検帳

寺社＝鎮守の森は今・同増補版

その他の地名＝国土地理院 2 万 5 千分 1 地形図・ゼンリン住宅地図

《窪川》

「仁井田郷談」甲把瑞益編著(1973 昭和 48 年/窪川史談会)

「史談くぼかわ第 1 号～第 5 号」

「窪川町史」窪川町史編集委員会編(1970 昭和 45 年)

「窪川町史」窪川町史編集委員会編(2005 平成 17 年)

《大正》

「大正町誌」伊与木定編(1970 昭和 45 年)

「上山郷のいろいろ搔き暑めの記 上・下」伊与木定著(1984 昭和 59 年)

「大正町史 通史編・資料編」町史編集会議(2006 平成 18 年)

《十和》

「十和の民俗 上」十和村教育委員会編(1974 昭和 49 年)

「十和の民俗 下」十和村教育委員会編(1977 昭和 52 年)

「ふる里の地名」十和村教育委員会編(1982 昭和 57 年)

「十和村史」十和村史編纂委員会(1984 昭和 59 年)

2. 引用資史料・参考図書・四万十町関連図書・オープンデータについて

○ 引用資史料

▼《地検帳》→「長宗我部地検帳（ちょうそがべちけんちょう）」（1587～1597 天正～慶長）

長宗我部元親が秀吉の命により天正 15（1587）年から同 18（1590）年の検地結果が史料の中核で、それに加えて慶長 2（1597）年の仕直し検地の結果や、山内家入国後の慶長 16（1611）年の土佐郡本川郷検地町なども含まれる。構成は多様で全 368 冊。

一国規模で残る地検帳としては唯一で、ホノギ、田等から現在と当時を比較できる。

刊本は、高知県立図書館から全 19 冊を出版。（1964）

窪川地域は、「長宗我部地検帳 高岡郡 下の 2」の仁井田之郷地検帳（天正 16 年）

大正地域は、「長宗我部地検帳 幡多郡 上の 1」の上山郷地検帳（慶長 2 年）

十和地域は、「長宗我部地検帳 幡多郡 上の1」の上山郷地検帳（慶長2年）
主としてホノギと字名との関係、寺社名の変遷で引用した。

▼《州郡志》→「土佐州郡志（とさしゅうぐんし）」（1704-1711 宝永年間/緒方宗哲編）

土佐藩中期の村別に調査してまとめた全27冊の地誌。村の四至、山川、寺社、特産物
など記載。原本は土佐山内家宝物資料館所蔵。

刊本は、土佐史談会から全2冊を復刻出版（1983-1984）

南路志の地誌と比較すると100年さかのぼるため、村の変遷、寺社の盛衰などが確認で
きる。主として、当時と現行との関係で引用した。

▼《寛保郷帳》→「御国七郡郷村牒（おくにななぐんごうそんちょう）」（1743 寛保3年）

寛保3（1743）年土佐絵図作成に当って編纂されたもので、原本は七郡（1,076村）7
冊のほか附録1冊計8冊よりなる。通称、寛保郷帳と呼ばれる当時の土佐の地高と人口そ
の他を集計した国勢調査。土佐史談会の会報土佐史談81号以下に連載された『土佐藩郷
村調査書』の表を当時の村の地勢として引用した。

▼《南路志》→「南路志（なんろし）」（1813 文化10年）

「南路志」は、高知城下の豪商美濃屋、すなわち武藤致和と平道父子が2代にわたって全力
をあげ、土佐の歴史・地理・民俗・宗教・文学などに関するさまざまな資料を120巻にまとめ、
文化10（1813）年に完成した一大叢書である。江戸時代大藩の地誌「紀伊続風土記」「芸藩通
志」を凌ぐ大史料集。

刊本は、高知県文教教会から洋装本上下2冊を出版。（1859～1960）

また、高知県立図書館から全10巻を出版。（1990～1997）

引用にあたっては、元の資史料名を付記した。

▼《群書類従》→「土佐国群書類従（とさのくにぐんしよるいじゅう）」（1881 明治14年）

編者は土佐の吉村春峰で、明治14年に成立したもの。江戸時代を中心として中世末から明
治初年までの土佐（高知）の各種の著書・史料を収録した大叢書。

刊本は、高知県立図書館から全13冊を出版。（1998-2011）

引用にあたっては、元の資史料名を付記した。

▼《群書拾遺》→「土佐国群書類従拾遺（とさのくにぐんしよるいじゅうしゅうい）」

土佐国群書類従に収められていない、土佐の近世を中心とした歴史、地理、民俗、文学、
宗教、芸能などの諸史料全70巻113冊が13部門に大別されている。この稿本は昭和20
年高知市空襲で焼失したことから、国立公文書館内閣文庫架蔵の写本を底本として全7巻
の計画で翻刻出版を進めている。

▼《皆山集》→「皆山集（かいざんしゅう）」

山内家元藩士で高知県庁で地誌編纂係を勤めた松野尾章行（まつのおあきつら）が土佐
藩史編纂のため集めた史料を書写した書物。歴史・宗教・経済・文芸など幅広く網羅し、
和装本で全116巻。

原本は高知県立図書館にある。2006年放送のNHK大河ドラマ『功名が辻』の映像撮影
のため同館が貸し出した1冊が紛失した。

刊本は、高知県立図書館から全10冊を出版。（1973-1978）

▼《その他》→その他の引用史料（南路志等に収録されているものもある。）

「土佐幽考」（1734/享保19年/安養寺禾麿（のぎまる）著）郡郷・山川・名所など土佐国地誌
「白湾往来」（皆山集に収録）地誌

「土陽淵岳誌（どようえんがくし）」（1746/延享3年/植木拳因著）3巻399項目の土佐博物誌
※<http://www.pref.kochi.lg.jp/~lib/shityouson/K-kennsyuu-H25.4.26.pdf> :

○ 参考図書

▼辞典

- 「地名語源辞典」山中襄太著(1968 昭和43年/校倉書房)
「日本地名語源辞典」吉田茂樹著(1981 昭和56年/新人物往来社)
「日本歴史地名体系40・高知県の地名」山本大編(1983 昭和58年/平凡社)
「地名用語語源辞典」楠原佑介・溝手理太郎著(1983 昭和58年/東京堂出版)
「地名アイヌ語小辞典」知里真志保著(1984 昭和59年/北海道出版企画センター)
「角川日本地名大辞典39 高知県」山本大編(1986 昭和61年/角川書店)
「地名伝承論・大和古代地名辞典」池田末則著(1990 平成2年/名著出版)
「コンサイス日本地名辞典」谷岡武雄・山口恵一郎著(1991 平成3年/三省堂/)
「日本地図地名辞典」(1991 平成3年/三省堂)
「日本地名辞典コンパクト版」(1991 平成3年/新人物往来社)
「日本語語源検索辞典・現代に生きる古代語中世語」/武光誠著(1992 平成4年/創拓社)
「民俗地名語彙辞典 上・下」松永美吉著・谷川健一編者(1994 平成6年/三一書房)
「地名学」ナフタリ・カドモン著(2004 平成4年/日本地図センター)

▼紀行文

- 「西部巡見日記」(1788/天明8年/森勘左衛門芳材著)
天明飢饉後の領内民情調査
「西郷浦山分廻見日記」下横目三八著(1801/享和元年)
当時の領内民情調査の記録
「土佐一覽記」川村与惣太著(1775/写本「図書館本」「広谷本」)
「校注 土佐一覽記」山本武雄著(1986/昭和61年/室戸市教育委員会)
「四国遍礼霊場記」寂本著(1689/元禄2年)
「四国遍礼霊場記・原本現代訳」(1987/昭和62年/村上護訳/教育社新書)
「四国遍路道中雑誌 三巻」松浦武四郎著(1844/弘化元年)
「松浦武四郎紀行集(中)」(1975/昭和50年/吉田武三編/富山房)
「測量日記」伊能忠敬・「伊能測量隊員旅中日記」柴山伝左衛門・「奥宮測量日記」奥宮弁蔵
「伊能測量隊土佐をゆく」山本文雄著(2007 平成19年/土佐史談会)
「ヘンロ道 高知県歴史の道調査報告書第二集」(2010 平成22年/高知県教育委員会)
「道は点である地域と地域を結ぶ線であり人々の往来や文化交流の舞台となってきた」
として、高知県教育委員会が旧来の道を記録保存するため平成6年度に編纂した参勤交代の道・「北山越え」に続く第二弾。

▼地名に関する参考図書(発行年順)

- 「地名の研究」柳田国男著(1968 昭和43年/角川文庫)
「日本古代地名の謎」本間信治著(1975 昭和50年/新人物往来社)
「地名」丹羽基二著(1975 昭和50年/秋田書店)

- 「日本の地名」松尾俊郎著（1976 昭和 51 年/新人物往来社）
- 「地名の語源」鏡味完二・明克著（1977 昭和 52 年/角川書店）
- 「地名を考える」山口恵一郎著（1977 昭和 52 年/NHK ブックス）
- 「方言の世界-ことばの生まれるところ」柴田武著（1978 昭和 53 年/平凡社）
- 「地名と風土・日本人と大地を結ぶ」谷川健一編（1981 昭和 56 年/小学館）
- 「日本の馬と牛」小高民雄著（1981 昭和 56 年/東京書籍/）
- 「地名研究のすすめ」落合重信著（1982 昭和 57 年/国書刊行会）
- 「地名学入門」鏡味明克著（1984 昭和 59 年/大修館書店）
- 「地名が語る日本語」鏡味明克著（1985 昭和 60 年/南雲堂）
- 「地名の探求」松尾俊郎著（1985 昭和 60 年/新人物往来社）
- 「日本の中の朝鮮文化 9」金達寿著（1986 昭和 61 年/講談社）
- 「災害と植物地名」小川豊著（1987 昭和 62 年/山海堂）
- 「方舟に乗った日本人」川崎真治著（1989 平成元年/新人物往来社）
- 「川を考える地名」小川豊著（1989 平成元年/山海堂）
- 「地名伝承論」池田末則著（1990 平成 2 年/名著出版）
- 「牛のきた道」本間雅彦著（1994 平成 6 年/未来社）
- 「地名研究入門」都丸十九一著（1995 平成 7 年/三一書房）
- 「日本の地名」谷川健一著（1997 平成 9 年/岩波新書）
- 「続日本の地名」谷川健一著（1998 平成 10 年/岩波新書）
- 「四万十川民俗誌」野本寛一著（1999 平成 11 年/雄山閣出版）
- 「縄文の地名を探る」本間雅彦（2000 平成 12 年/高志書院）
- 「気候地名集成」吉野正敏著（2001 平成 13 年/古今書院）
- 「古代人の心で地名を読む」永田良茂著（2001 平成 13 年/友月書房）
- 「住所と地名の大研究」今尾恵介著（2004 平成 16 年/新潮社）
- 「地名語彙の開く世界」上野智子著（2004 平成 16 年/和泉書院）
- 「地名学」ナフタリ・カドモン（2004 平成 16 年/日本地図センター）
- 「屋号語彙の開く世界」岡野信子著（2005 平成 17 年/和泉書院）
- 「枕詞と古代地名」勝村公著（2005 平成 17 年/批評社）
- 「谷川健一全集 15 日本研究所の歩み他」谷川健一著（2011 平成 23 年/富山房 IN）
- 「あぶない地名-災害地名ハンドブック」小川豊著（2012 平成 24 年/三一書房）
- 「地名は警告する」谷川健一編（2013 平成 25 年/富山房 IN）
- 「地名に隠された南海津波」谷川彰英著（2013 平成 25 年/講談社+α 新書）
- 「高知の謎 地理・地名・地図」宅間一之監修（2015 平成 27 年/実業之日本社）

▼言語学・方言

- 「高知の研究 6 方言民俗編」（1982 年/清文堂出版/山本大編）
- 「方言の世界」（1978 年/平凡社/柴田武著）
- 「高知県方言辞典」（1985 年/高知市文振事業団/土居重俊・浜田数義著）
- 「土佐ことば」（2013 年/南の風社/吉川義一著）

▼高知県出版物

○埋蔵文化財報告書等

- 「高知県広瀬遺跡発掘調査報告書」岡本健児・廣田典夫（/十和村教育委員会）
「窪川町仕出原出土の注口土器（高知県文化財調査報告書第27集）」
「四万十川流域の縄文文化研究」木村剛朗著（/幡多埋文研）
「四国西南部の縄文後期—伊吹町式土器の研究」木村剛朗ほか
「高野大工・口神の川一町切遺跡発掘調査実績報告書」窪川町教育委員会
「若井川カキヤマ・峰ノ上下屋敷遺跡他試掘調査実績報告書」窪川町教育委員会
「平成3年度窪川町南部遺跡群試掘調査概要報告書」窪川町教育委員会
「窪川北部県営圃場整備に係る試掘調査概要」坂本憲昭著（/窪川町教育委員会）
「峰の上遺跡」近森泰子著（/高知県文化財センター）
「窪川町川口遺跡埋蔵文化財発掘調査概要」寺川嗣著（/窪川町教育委員会）
「窪川町西部遺跡群（神ノ西・家地川）遺跡発掘調査概要報告書」寺川嗣著（/窪川町教委）
「窪川町西部遺跡群越の下遺跡発掘調査概要報告書」寺川嗣著（/窪川町教育委員会）
「窪川町浜の川・六反地遺跡・小向地区発掘調査概要報告書」寺川嗣著（/窪川町教委）
「平成三年度窪川町南部遺跡群試掘調査概要報告書」廣田佳久・近森泰子（/高知県埋文セン）
「窪川町米奥試掘調査概要報告書」藤方正治・山本純代編（/高知県埋蔵文化財センター）
「十川駄場崎遺跡第五次発掘調査」前田光雄編（/十和村教育委員会）
「窪川町埋蔵文化財包蔵地調査カード」山下英雄・寺川嗣編（/高知県教育委員会）
「十川駄場崎遺跡発掘調査報告書」山本哲也著（/十和村教育委員会）
「根々崎五反地遺跡・カマガ淵遺跡・川口遺跡・神ノ西遺跡・辻ノ川遺跡・西原遺跡」

○宗教（社寺）

- 「長宗我部地検帳の神々」廣江清著（1972 昭和47年/土佐民俗学会）
「土佐神道考古学」岡本健児著（/高知県神社庁）
「高知県神社誌」竹崎五郎著
「高知県神社明細帳」高岡神社
「鎮守の森は今」竹内荘市著（2009 平成21年）
「鎮守の森は今 追補版」竹内荘市著（2009 平成21年）

○歴史・地理

- 「長宗我部地検帳の研究」横川末吉著（1961 昭和36年/高知市民図書館）
「土佐の地名」徳弘勝著（1976 昭和51年/土佐史談会）
「西南の地名」岡村憲治著（1981 昭和56年）
「横川末吉遺稿集 地方史を歩く—土佐—」（1982 昭和57年/土佐史談会）
「土佐の地名メモ」徳弘まさる著（1984 昭和59年/高知印刷）
「土佐の峠風土記」山崎清憲著（1991 平成3年/高知新聞社）
「土佐地名往来」片岡雅文署名記事（2003 平成15年～現在/高知新聞夕刊・毎週月曜日）
「地検帳が語る幡多の歴史」上岡正五郎著
「高知県集落台帳」高知県企画調整課編（1975 昭和50年）
「高知県地名辞典—地名の読みかた—」RKC高知放送・高知新聞社（2007 平成19年）

○産業

- 「御留山総目録」
- 「御留山改帳・幡多郡」(1684 貞享元年)
- 「西筋郷中見分帳」土佐藩庁(1710 宝永7年)
- 「幡多郡処林」史料(1740 元文5年)
- 「幡多郡御山牒」(1800 寛政12年)
- 「幡多郡明所山帳」高知県勸業課編史料(1824 文政7年)
- 「土佐藩農業経済史」平尾道雄著
- 「土佐藩林業経済史」平尾道雄著
- 「土佐藩漁業経済史」平尾道雄著
- 「土佐の林業年表」辻隆道著
- 「土佐藩林制史」門田斉著(1935 昭和10年/高知営林局)
- 「高知営林局史」高知営林局編(1973 昭和48年)
- 「高知県土木史」
- 「四国電力四十年の歩み」四国電力株式会社
- 「四国郵政五十年の歩み」四国郵政局
- 「高知県電信電話事業史」四国電気通信局
- 「高知県警察史」高知県警察本部
- 「高幡消防組合二十五年の歩み」高幡消防組合
- 「高知信用金庫沿革史」高知信用金庫

▼窪川町出版物

- 「仁井田郷談」甲把瑞益編著(1973 昭和48年/窪川史談会)
- 「仁井田之鎮座伝記」甲把瑞益編著
- 「窪川町史」窪川町史編集委員会編(1970 昭和45年)
- 「仁井田村史」
- 「東又村誌」
- 「興津村誌」
- 「窪川町史」窪川町史編集委員会編(2005 平成17年)
- 「窪川町農村空間整備構想計画」窪川町農村開発整備協議会編(1980 昭和55年)
- 「窪川町の史蹟と文化財」窪川町教育委員会編(1981 昭和56年)
- 「窪川史料文献集」広田瑞仙著
- 「窪川風土記」広田瑞仙著(1963)
- 「史談くぼかわ第1号～第9号」
- 「興津八幡宮古式由来書」
- 「天変記」興津八幡宮
- 「土佐興津の歴史」岡部金重著
- 「おれたちの興津」全解連興津支部編(1981 昭和56年)
- 「志和 池家文書」志和池家蔵
- 「吉川の水音」志和池家蔵
- 「薬師寺代々住職」村瀬泰幸著

「志和二千年」佐々木泰清
「志和 第1号～第5号」
「窪川町 床鍋」庄崎一著
「窪川町平野鉄滓調査報告書」和鋼博物館
「窪川私記」安養寺禾麿著
「窪川夜話」辻重憲著
「窪川事物誌」辻重憲著
「郷土の郷土」辻重憲著
「辻重憲遺作文献」
「仁井田・窪川郷土」楠瀬恵美著
「古代と窪川」佐々木馬吉著（/朋琢社）
「天正の窪川Ⅱ」佐々木馬吉著
「窪川の神々」佐々木馬吉著
「仁井田五人衆」佐々木馬吉著
「窪川のみほとけ」佐々木馬吉著
「窪川こども風土記」
「窪川の城下町」土佐窪川古溪社
「窪川武功六代記」林一将著
「窪川林光山物語」林一将著
「窪川村落自治の変遷」林一将著
「東見付郷土史考」林一将著
「我等の郷土」近森幸雄著
「地域計画試論」市川和男著（2004 平成 16 年）
「地域マンダラ論考」市川和男著（2004 平成 16 年）
「広報くぼかわ」

▼大正町出版物

「大正町誌」伊与木定編（1970 昭和 45 年）
「下津井村お留山記 上」伊与木定著（1974 昭和 49 年/高知営林局）
「下津井村お留山記 下」伊与木定著（1974 昭和 49 年/高知営林局）
「上山郷のいろいろ搔き暑めの記 上・下」伊与木定著（1984 昭和 59 年）
「大正のむかし話」多賀一造編（1989 平成元年）
「大正町の文化財」大正町教育委員会編（1993 平成 5 年）
「構原川の岸边にて」武内景明著（2001 年平成 13 年）
「蘇れ四万十川」大正町編（2001 平成 13 年）
「里に生き里に死す 武政秀美遺稿集」（2003 平成 15 年）
「大正町史 通史編・資料編」町史編集会議（2006 平成 18 年）
「歩」武内一著
「農家民宿はこぼの四季—大正中津川のくらし」山崎眞弓編（2014 平成 26 年/南の風社）
「広報大正」

▼十和村出版物

- 「郷土史雑考」十川第一尋常高等小学校郷土調査部編・芝幸弘氏蔵（1936 昭和 11 年）
「十和の民俗 上」十和村教育委員会編（1974 昭和 49 年）
「十和の民俗 下」十和村教育委員会編（1977 昭和 52 年）
「十和村神社棟札全集」十和村教育委員会（1980 昭和 55 年）
「中世古城址調査図」（1982 昭和 57 年）
「門脇家御山控帳」刊本・蕨川正重編（1982 昭和 57 年：原本/1756 宝暦 6 年）
「ふるりの地名」十和村教育委員会編（1982 昭和 57 年）
「十和村史」十和村史編纂委員会（1984 昭和 59 年）
「十和村史料」（1 号～323 号・号外）
「とおわの民話」とおわの民話編集委員会編（2002 平成 15 年）
「十和千祭 古里お祭り訪問記」竹内荘市著（2005 平成 17 年）
「複合経営に生きる」岡峯藤太著
「広報十和村」

▼その他の地名に関する県内資料

高知工専学術紀要(3, 4, 5, 6, 7, 8, 9)

川野茂信氏

- ・「ホノキについて」
- ・「長宗我部地検帳のホノキについて」

土佐史談会の会報「土佐史談」

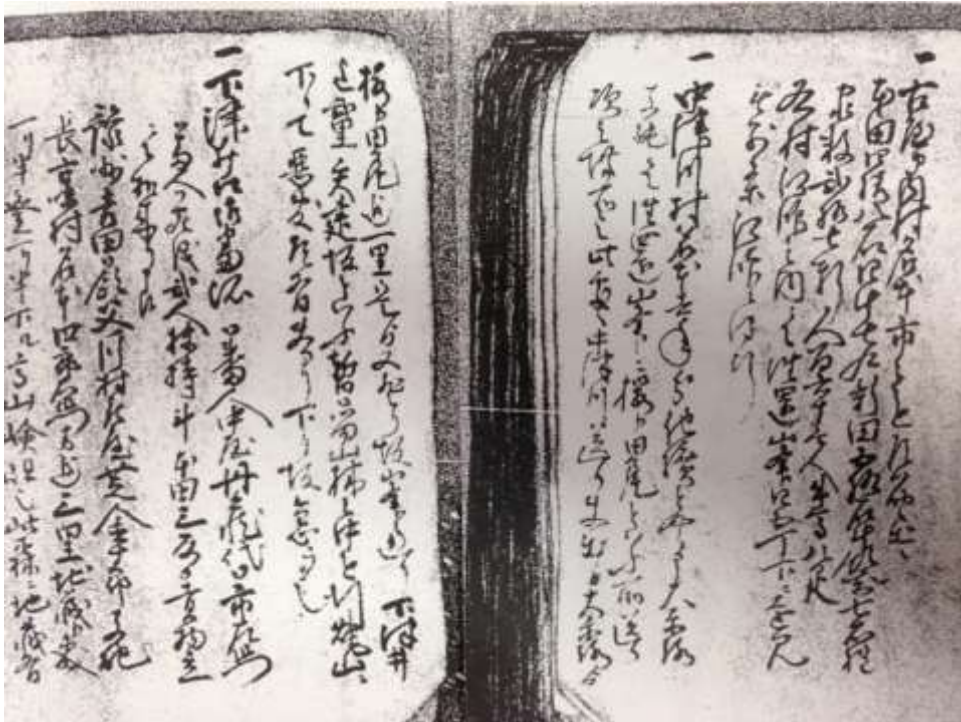
- ・土佐史談 081 伊能忠敬の土佐測量地図（1952・10 月）
- ・土佐史談 081 土佐藩郷村調査書・平尾道雄（1952・10 月連載）
- ・土佐史談 119 幡多郡紀行・防意軒半開（1968・3 月連載・橋田残丘）
- ・土佐史談 122 ホノギの語源・川野茂信（1969・3 月）
- ・土佐史談 122 土佐藩在郷商人-志和池文書（1969・3 月連載）
- ・土佐史談 125 渡川と四万十川の語源・山崎進（1970・3 月）
- ・土佐史談 199 四万十川その名称の変遷・橋田庫欣（1995・8 月連載）
- ・土佐史談 202 四万十川名称の由来・橋田庫欣（1996・8 月連載）
- ・土佐史談 203 杓子今昔・高橋正（1997・1 月）
- ・土佐史談 203 森と丸・橋田庫欣（1997・1 月）
- ・土佐史談 205 四万十川その名称と由来（中）橋田庫欣司（1997・8 月）
- ・土佐史談 205 土佐の湧水・武市伸幸（1997・8 月）
- ・土佐史談 207 四万十川その名称と由来（下）橋田庫欣（1998・3 月）
- ・土佐史談 211 四万十川の語源・腰山秀夫（1999 年 8 月）

▼地名に関するWebサイト

- 「高知県防災マップ」ハザードマップ
<http://bousaimap.pref.kochi.lg.jp/kochi/top/select.asp?dtp=14> :
- 「地理院地図（電子国土Web）」地図はやっぱり国土地理院

<http://maps.gsi.go.jp/#15/33.273336/132.998664> (中津川周辺)

- 「歴史地名ジャーナル」 ジャパンナレッジの会員でなくても閲覧可能
<http://japanknowledge.com/articles/blogjournal/howtoread/index.html> :
- 「郵便番号検索」 多様な検索ソフトの中でこれが使いやすい
<http://api.nipponsoft.co.jp/zipcode/> (日本ソフト販売株式会社)



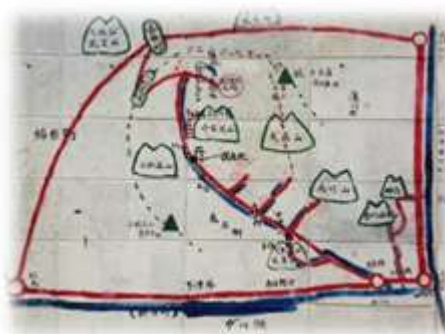
「西郷浦山分廻見日記」下横目三八著(1801 享保元年) 古屋が内村、中津川村、下津井村とある



「おかえり」の声が聞こえるよ



苔むす親柱 小松尾山「一本杉橋」



付 録

1. 大正中津川地区の人口統計等

	世帯	男	女	人口	出典及び出来事
1743 寛保 3 年	30			123	御国七郡郷村牒
1805 文化 2 年	28	58	51	109	切支丹宗門御改諸指出控
1892 明治 24 年	33	94	82	176	角川地名大辞典 39 高知県 p 715 引用
1914 大正 3 年	44	113	116	229	角川地名大辞典 39 高知県 p 715 引用
1945 昭和 20 年	50			310	角川地名大辞典 39 高知県 p 715 引用
1957 昭和 32 年	59	158	168	326	以下、年度毎の「事務報告書」から引用
1958 昭和 33 年					
1959 昭和 34 年	94	211	199	410	
1960 昭和 35 年	89			397	
1961 昭和 36 年					
1962 昭和 37 年					
1963 昭和 38 年					
1964 昭和 39 年					
1965 昭和 40 年	63			266	
1970 昭和 45 年	69			262	
1971 昭和 46 年					
1972 昭和 47 年					
1973 昭和 48 年	52			199	
1974 昭和 49 年	49			181	
1975 昭和 50 年	46			178	
1976 昭和 51 年	43	79	86	165	
1977 昭和 52 年	43	73	83	156	
1978 昭和 53 年	46	73	82	155	
1979 昭和 54 年	47	76	82	158	
1980 昭和 55 年	48	69	80	149	
1981 昭和 56 年	48	68	84	152	
1982 昭和 57 年	45	68	86	154	
1983 昭和 58 年	46	69	82	151	
1984 昭和 59 年	46	72	82	154	
1985 昭和 60 年	45	71	84	155	

	世帯	男	女	人口	出典及び出来事
1986 昭和 61 年	45	68	84	152	
1987 昭和 62 年	46	69	80	149	
1988 昭和 63 年	47	66	80	146	
1989 平成元年	49	66	85	151	
1990 平成 2 年	50	68	84	152	
1991 平成 3 年	48	63	80	143	
1992 平成 4 年	50	60	81	141	
1993 平成 5 年	46	56	82	138	
1994 平成 6 年	43	55	72	127	
1995 平成 7 年	43	54	67	121	
1996 平成 8 年	42	50	66	116	
1997 平成 9 年	42	52	69	121	
1998 平成 10 年	42	51	67	118	
1999 平成 11 年	42	46	64	110	
2000 平成 12 年	44	47	64	111	
2001 平成 13 年	43	48	60	108	
2002 平成 14 年	42	49	58	107	
2003 平成 15 年	39	45	53	98	
2004 平成 16 年	38	40	50	90	
2005 平成 17 年	38	41	53	94	
2006 平成 18 年	37	41	47	88	
2007 平成 19 年	41	43	46	89	
2008 平成 20 年	40	42	46	88	
2009 平成 21 年	38	37	44	81	
2010 平成 22 年	39	35	44	79	
2011 平成 23 年	39	35	42	77	
2012 平成 24 年	38	35	40	75	
2013 平成 25 年	34	34	38	72	
2014 平成 26 年	36	35	38	73	
2015 平成 27 年	36	32	37	69	
2016 平成 28 年	34	29	32	61	

※資料：大正町 事務報告書

※資料：「高知県の集落」高知県（5年毎の国勢調査の結果を、集落別の人口数値を分析）

※資料：高知県中山間地域対策課HP（平成12年の数値は、H13-8, 9集落データ）

<http://www.pref.kochi.lg.jp/soshiki/121501/syuurakutyousa-kako.html>

2. 地区内の道路（四万十町道路台帳）

	路線名 路線番号	道路 種別	総延長 (m)	起点	終点	説明
1	大奈路中津川線 町道第 20127 号	1 種	11631.60	大正大奈路 16 番地先	大正中津川 610-6 番地先	大奈路の国道 439 号分岐（武政自動車）から林道松原中津川線ふるさと橋手前を春分峠方面へ約 2 km
2	中津川成川線 町道第 20133 号	3 種	2810.50	国有林薄木山 4013 林班番地先	大正中津川 770-15 番地先	町道大奈路中津川線成川口左岸から旧成川集落と 4016 林班境まで
3	中津川 1 号線 町道第 20134 号	3 種	151.10	大正中津川 60-3 番地先	大正中津川 560-1 番地先	町道大奈路中津川線農家民宿はこば入口からサワタリ橋まで
4	中津川 2 号線 町道第 20135 号	3 種	235.10	大正中津川 211-3 番地先	大正中津川 20-1 番地先	本村集落・井原前から谷和典宅先携帯基地局まで
5	中津川 3 号線 町道第 20136 号	3 種	67.00	大正中津川 112-2 番地先	大正中津川 130-2 番地先	浜田武夫宅から田辺都一宅まで
6	中津川 4 号線 町道第 20137 号	3 種	272.00	大正中津川 656 番地先	大正中津川 314 番地先	町道大奈路中津川線仲が市から大西宅まで
7	森ケ内線 町道第 20138 号	3 種	1013.10	大正中津川 683-2 番地先	大正中津川 458-1 番地先	森ケ内橋から奥森ケ内田辺英喜宅まで
8	久木ノ森線 町道第 20165 号	3 種	1760.20	大正中津川 766-41 番地先	大正中津川 766-9 番地先	久木の森を経由する旧道、大奈路中津川線
9	中津川 5 号線 町道第 20166 号	3 種	118.10	大正中津川 234-2 番地先	大正中津川 271-1 番地先	中津川新消防屯所（旧中津川小学校プール）から山脇茂宅まで
10	中津川 6 号線 町道第 20171 号	3 種	92.40	大正中津川 504 番地先	大 正 中 津 川 500-1 番地先	森ケ内線（森ケ内橋から 50 m）から田辺吉道宅まで
11	中津川 7 号線 町道第 20172 号	3 種	112.30	大正中津川 683-1 番地先	大正中津川 684-5 番地先	森が内停留所から林幸一宅まで
12	中津川 8 号線 町道第 20173 号	3 種	1323.80	大正中津川 683-4 番地先	大正中津川 615-30 番地先	森が内停留所から横の谷川の上流 1, 3 km

3. 長宗我部地検帳による森河内村・中津河村

※この表の「田」は、地検帳の出を含めた反・代をa（アール）に換算した。

郷村	ホノギ	筆数	田 (a)	屋敷 (件)	耕作者・筆数 (田、畠、屋敷の数)
森河内村 全筆 35 耕作 6 人 4 世帯 田 119 a	中ヤシキ	7	33	中屋敷 1	市大夫 7
	宮ノワキ	1			市大夫 1
	上クホ	19	79	中屋敷 1 下屋敷 1	九良衛門 9, 九良二良 7, 忠左衛門 2 京蔵 1
	タカヤフ	8	8	下屋敷 1	忠左衛門 4, 小五良 3, 九良二良 1
中津河村 全筆 121 耕作 17 人 17 世帯 田 343 a うち成川 全筆 15 耕作 4 人 4 世帯 田 29 a	中カイチ	2	3		不明
	地蔵院ヤシキ	9	19	中屋敷 1	京蔵 9
	河内神田	6	36		善左衛門 2, 二良三良 1, 善五良 1, 四良右衛門 1, (惣中) 1 人
	なり田	25	63	中屋敷 3 下屋敷 1	京蔵 7, 源兵衛 7, 二良三良 5, 助左衛門 3, 助五良 2, 与大良 1
	ツルノモト	24	64	中屋敷 1 下屋敷 1	助衛門 7, 京蔵 5, 与大良 5, 善左衛門 2, 二良三良 1, 二良大良 1, 四良衛門 1, 与七 1, (惣中) 1
	むろや	11	4	下屋敷 3	与大良 4, 三良衛門 2, 与七 2, 二良三良 1 不明 2
	林上	19	52	中屋敷 1 下屋敷 1	四良衛門 6, 善左衛門 3, 善五良 3, 助左衛門 2 善衛門 1, 京蔵 1, 与大良 1, 三良衛門 1, 不明 1
	ウシハラ	2	4		善五良 2
	サハタリ	8	71		善左衛門 2, 京蔵 1, 助衛門 1, 善衛門 1 善五良 1, 源衛門 1, 与大良 1
	成川	15	30	下屋敷 4	三良四良 6, 五良次良 3, 三良衛門 3, 与大良 (惣中) 2
<p>※1：耕作面積（田）の多い順は、京蔵 68a、市大夫 33a、与大良 32a、九良二良 31a、源兵衛 29a、二良三良 28a、助衛門 28a、忠左衛門 27a、九良衛門 23a、善衛門 24a、善五良 23a、善左衛門 22a、四良衛門 20a、助左衛門 16a、三良衛門 11a、四良右衛門 10a、源衛門 9a、三良四良 7a、与七 6a、五良次良 5a。中津川の田の総地積は、462 a で 1 筆の平均地積は、6.16 a。</p> <p>※2：森が内の総地積は 119 a で 1 筆平均 9.15 a。本村（成川含）の総地積は 343 a で平均 5.52 a</p> <p>※3：本村の「京蔵」は、地蔵院に居をかまえ、地蔵院、門田、ツルイノ本に田 53 a、畑 39 a を耕作。</p> <p>※4：森が内の「市大夫」は、中屋敷に居をかまえ、中屋敷の田を 33 a、畑 13 a を耕作している。</p> <p>※5：本村の「四良衛門」は、広い宅地（1190 m²）であるが、田は 20 a と少ない。</p>					

4. 全国の中津川

▼明治22年市町村合併前の郷村【解説は「大日本地名辞書/吉田東吾著（1900 明治33年）】

変更種別	郡名等	自治体名	変更対象郷村
新設 村制	福島県大沼郡	野尻村	大沼郡 下中津川村, 野尻村, 松山村, 小中津川村
	<p>【解説】野尻川の別称を中津川。両原、喰丸、中津川等を合して大蘆村（おおあしむら）と云ふ。（⑦岩代/福島 p 244）</p> <p>①〒965-0103 福島県大沼郡昭和村大字下中津川 電子国土Web検索 経緯十進：37.33591999821, 139.6069770961</p> <p>②〒968-0104 福島県大沼郡昭和村大字小中津川 電子国土Web検索 経緯十進：37.338660030273, 139.6392913644</p>		
	福島県田村郡	御館村	田村郡 下枝村, 柳橋村, 中津川村, 黒木村, 駒板村, 木目沢村, 牛糞本郷村
	<p>【解説】〒963-0832 福島県郡山市中田町中津川。大字、河川の名称。今、御館村の大字にて、柳橋の西に方り、下枝と相接す。（②岩代/福島 p 131）</p> <p>電子国土Web検索 経緯十進：37.351072, 140.511103</p>		
	茨城県新治郡	高浜町	新治郡 高浜村, 北根本村, 中津川村, 小井戸村, 東田中村, 東大橋村
	<p>【解説】〒315-0043 茨城県石岡市中津川。大字、河川の名称。今高浜町と云ひ、人口三千余、根本、中津川、田中、大橋等をも合せたり。霞ヶ浦の湖頭に居り、恋瀬川此に来り。中津川とは又恋瀬の一名也（⑥常陸/茨城 p 1121）</p> <p>電子国土Web検索 経緯十進：36.171594, 140.286285</p>		
	埼玉県秩父郡	大滝村	秩父郡 新大滝村, 中津川村, 三峯村
	<p>【解説】〒369-1903 埼玉県秩父市中津川。大字、河川の名称。深山の極に在りて、秩父の奥の終と呼ぶる。三国山あり。武上新三州の交界にあたる。新記云、中津川は深山窮谷の最と云ふべし。牛馬の通路もなき険難、古は諸役を免除せられる。（⑥武蔵/埼玉 p 477）</p> <p>電子国土Web検索 経緯十進：36.000564, 138.807632</p>		
	福井県大野郡	下庄村	大野郡 菖蒲池村, 中保村, 堂本村, 友江村, 中挾村, 中荒井村, 中野村, 西市村, 庄林村, 中津川村, 横枕村, 南新在家村, 東大月村, 西大月村, 太田村, 小矢戸村, 大矢戸村
	<p>【解説】〒912-0004 福井県大野市中津川。大字の名称。大日本地名辞典には特に記載なし。</p> <p>電子国土Web検索 経緯十進：36.005806149075, 136.49989706626</p>		
町制	岐阜県恵那郡	中津川町	恵那郡 中津川村
	<p>【解説】〒508-0001 岐阜県中津川市中津川。大字の名称。旧中津川宿、近年駒場、手賀野と合せ、中津町と改称す。（⑤美濃/岐阜 p 507）</p> <p>電子国土Web検索 経緯十進：35.499758, 137.518723</p>		
新設	奈良県吉野郡	野迫川村	吉野郡 今井村, 平川村, 柞原村, 中村, 上村, 池津川村,

村制		紫園村, 中津川村, 立里村, 北股村, 檜股村, 北今西村, 弓手原村, 平村
		【解説】〒648-0303 奈良県吉野郡野迫川村中津川。大字の名称。今野迫川村に改む。野迫川の谷間に在り、旧十二村荘に属せり。中津川の名は太平記に出でて今大字存す。(②大和/奈良 p 423) 電子国土Web検索 経緯十進 : 34.150303, 135.703737
和歌山県那賀郡	粉河村	那賀郡 粉河村(本), 東毛村, 猪垣村, 中津川村, 藤井村, 中山村, 下丹生谷村(微)
		【解説】〒649-6513 和歌山県紀の川市中津川。大字、河川の名称。粉川寺の北に連り山中の里なり。今粉川村に属す。(②紀伊/和歌山 p 934) 電子国土Web検索 経緯十進 : 34.295928, 135.40312
和歌山県日高郡	矢田村	日高郡 小熊村, 土生村, 千津川村, 中津川村, 鐘巻村, 若野村, 入野村
		【解説】〒649-1325 和歌山県日高郡日高川町中津川。大字、谷川の名称。大日本地名辞典には特に記載なし。 電子国土Web検索 経緯十進 : 33.935402, 135.199234
徳島県三好郡	三縄村	三好郡 中西村, 漆川村, 中津川村, 松尾村, 大利村, 川崎村
		【解説】〒779-5163 徳島県三好市池田町中津川。大字の名称。大日本地名辞典は特に記載なし。 電子国土Web検索 経緯十進 : 33.987762, 133.815987
愛媛県西宇和郡	双岩村	西宇和郡 中津川村, 若山村, 釜倉村, 布喜川村, 和泉村
		【解説】〒796-8030 愛媛県八幡浜市中津川。大字、谷川の名称。中津大川が五反田川に合流し八幡浜市街地に流れる。※県内にこの他、西予市城川町に2箇所、大洲市の中津川地名がある。 電子国土Web検索 経緯十進 : 33.439275, 132.466546
高知県高岡郡	松葉川村	高岡郡 七里村, 中村, 勝賀野村, 川ノ内村, 北ノ川村, 市生原村, 一斗俵村, 中津川村, 米奥村, 作屋村, 日野地村, 秋丸村
		【解説】〒786-0096 高知県高岡郡四万十町窪川中津川。大字、谷川の名称。 電子国土Web検索 経緯十進 : 33.295077, 133.103979
鹿児島県桑原郡	牧園村	桑原郡 宿窪田村, 三体堂村, 万膳村, 上中津川村, 下中津川村, 持松村
		【解説】大字、河川の名称。今牧園村の大字なり、一名犬飼いと曰へり、温泉数所あり。(④大隅/鹿児島 p 554) ①〒899-6604 鹿児島県霧島市牧園町上中津川 電子国土Web検索 経緯十進 : 31.85054, 130.790509 ①〒899-6506 鹿児島県霧島市牧園町下中津川 電子国土Web検索 経緯十進 : 31.824983, 130.766476
鹿児島県桑原郡	吉松村	桑原郡 中津川村, 川添村, 川西村, 鶴丸村, 般若寺村
		【解説】〒899-6102 鹿児島県始良郡湧水町中津川。桑原郡はかつて大隅国に存在した郡。 電子国土Web検索 経緯十進 : 32.015481, 130.751102
		【その他大日本地名辞書に掲載している河川の名称等】 ≪陸中/岩手⑦647≫岩手県盛岡市を流れる河川で上流部に集落名もある。盛岡の城南を流る。浅岸の

清川と、外山の濁川の合流に名づく。

電子国土Web検索 経緯十進 : 39. 711813, 141. 192593

《相模/神奈川⑥ p 62》神奈川県清川村、愛川町、厚木市を流れる河川。大山の陰なる丹沢山中に発し、宮が瀬を経て、相模川に流れる。長十里。其峡谷を川入と称す。津久井、奥三保に接し、地勢険絶也。

電子国土Web検索 経緯十進 : 35. 52676, 139. 307756

《越後/新潟⑤ p 220》長野県吾妻郡中之条町、下水内郡栄村、新潟県中魚沼郡津南町を流れる河川。清津川と並行して南北に流れ、越後山系の横谷なり。其水源野反池は今上州吾妻郡の管内とす蘆が崎に於て信濃川に入る、総長十二里余。信州人は此川を魚沼川と呼ぶ。国南と信州上州との境なる秋山より流れ出る。

電子国土Web検索 経緯十進 : 37. 010632, 138. 65039

《摂津/大阪② p 558》淀川の一支出して柴島長柄の間より西流す。川尻を伝法口と云ふ。中津川又長柄川と呼ぶ。中津川又長柄川と呼ぶ。

電子国土Web検索 経緯十進 : 34. 710097, 135. 492475

▼明治22年市町村合併以後の（高知県幡多郡東上山村を除く）

	変更種別	郡名等	自治体名	変更対象町村
1897 明治 30 年	新設	岐阜県恵那郡	中津町	恵那郡 中津川町, 手賀野村, 駒場村
1952 昭和 27 年	市制	岐阜県	中津川市	恵那郡 中津川町
1954 昭和 29 年	新設/町制	薩摩郡	薩摩町	薩摩郡 求名村, 中津川村, 永野村
【解説】 〒895-2202 鹿児島県さつま町中津川。大字の名称。 電子国土Web検索 経緯十進 : 31. 905195, 130. 543735				
1958 昭和 33 年	編入/町制	山形県西置賜郡	飯豊町	西置賜郡 飯豊村, 南置賜郡 中津川村
【その他大日本地名辞書に掲載している河川の名称等】 《羽前/山形⑦ p 703》中津川は、もと白川上游の一名にや、山中の水の義なるに似たり。或は疑ふ、置賜（郡）の松川と、小国谷の横川の間なればか。 電子国土Web検索 経緯十進 : 37. 92008, 139. 876921				

▼電子国土Webで検索できるその他の中津川地名

区分	所在地	経緯十進
河川名	秋田市雄和相川付近で雄物川に合流する小河川名	39. 579182, 140. 164025
河川名	福島県耶麻郡北塩原村と猪苗代町の境を流れる河川で五色沼/秋元湖に入る。	37. 666378, 140. 141237
河川名	神奈川県足柄上郡松田町を流れる小河川	35. 384598, 139. 132243
集落名	新潟県佐渡市大和田にある集落	38. 038247, 138. 359381
河川名	静岡県川根本町高郷付近に流れる谷川	35. 03937, 138. 074809
河川名	三重県亀山市関町沓掛付近に流れる谷川	34. 874753, 136. 345289
集落名	京都市北区雲ヶ畑中津川町を流れる谷川。	35. 112581, 135. 724958

河川名		
集落名	兵庫県洲本市中津川組	34. 258974, 134. 912026
河川名	山口県岩国市錦町大野付近に流れる谷川	34. 313117, 131. 93372
集落名	徳島県神山町東分の集落。中津川（なかつこう）	33. 98423, 134. 402071
集落名	愛媛県西予市城川町古市付近、黒瀬川の支流三滝川にある集落。中津川洞遺跡が近くにある。	33. 377353, 132. 772812
集落名	愛媛県西予市城川町駄場付近の集落、谷川の名称。近くに名刹竜沢寺がある。	33. 362541, 132. 693533
河川名	愛媛県大洲市八多喜町河春付近に流れる小河川。上須戒川に合流	33. 548137, 132. 507112
河川名	高知県吾川郡仁淀川町名野川を流れる河川。中津溪谷が有名	33. 562013, 133. 128269
河川名	大分県中津市に流れる山国川の下流域の分河川。	33. 611233, 131. 190802
集落名	熊本県山鹿市鹿北町の中津川集落	33. 117668, 130. 681654
河川名	熊本県天草市有明町大島子付近に流れる河川	32. 468043, 130. 268691
河川名	熊本県球磨郡球磨村大字一勝地付近を流れる河川。中津集落がある。	32. 232787, 130. 641968

※地理院地図（電子国土Web）

<http://maps.gsi.go.jp/#5/35.362222/138.731389>

5. 地区内の河川・溪流（渡川水系 1 支橋原川）

		管理	延長	流域面積	備考
1	2次支川 中津川	県	12.1 km		ふるさと橋の上流 100m位 左岸：森ヶ内山 702-4 先 右岸：北峯山 611-33 先
2	3次支川 成川	町	3.0 km	6.0 km ²	
4	3次支川 門田川	町	0.4 km	0.2 km ²	
5	3次支川 森ヶ内川	町	1.0 km	0.5 km ²	
6	3次支川 小松尾川	町	4.0 km	12.0 km ²	
7	カシ谷川				危険溪流

※渡川水系河川整備計画（平成 27 年 2 月 20 日公表）別表 3. 2. 2

<http://www.skr.mlit.go.jp/nakamura/seibikeikaku/plan/plan.html>

※四万十町河川台帳

四万十町建設課データから引用

6. 中津川の一筆限絵図面（四万十町役場大正地域振興局地域振興課所有）



7. 久木の森風景林マップ（久木の森風景林に掲示）



8 森下嘉晴さんの絵地図



编者略歴

武内 文治 (たけうち ぶんじ)
1954 年生まれ
日本地名研究所会員
土佐史談会会員



メール：40010.takeuchi@gmail.com

四万十町地名辞典の執筆中であるが、中津川地区の伝統文化ワークグループの勧めで「大正中津川地名辞典」を先行して出版することになった。

「大正中津川地名辞典」

中津川集落活動センター開所記念

2016 年 2 月 14 日 第 3 版発行

編 者 武内文治

企 画 中津川集落活動センター

伝統文化ワークグループ

奥四万十元気プロジェクト

発行所 四万十町大正地域振興局